

2013 年度

芭蕉とアツギエー工考

指導教授

板坂則子

研究科

文学研究科

専攻

日本語日本文学専攻

氏名

モハammad・イムラン

目次

目次	1
はじめに	3
第一章、文学面から見たヒンディー語の歴史	6
(一)、文字の変遷	8
(二)、言語の変遷	9
一、ヴェーダ・サンスクリット語	11
二、叙事詩・サンスクリット語	15
三、古典サンスクリット語	17
四、プラークリット語	21
五、パーリ語	22
六、アパブランシャ語	23
七、ヒンディー語	25
(一)、アーディ・カール आदिकाल (古代)	26
(二)、マッデ・カール मध्यकाल (中代)	28
1. バクティ・カール भक्तिकाल (献身時代)	28
2. リーティー・カール रीतिकाल (作詩法文学時代)	33
(三)、アドニク・カール आधुनिक काल (近代、現代)	35
1. パーラテンドウ・ユグभारतेन्दु-युग (パーラテンドウ時代)	37
2. ドウヴィヴェーディ・ユグद्विवेदी-युग (ドウヴィヴェーディ時代)	37
3. チャーヤーワード・ユグछायावाद-युग (陰影時代)	38
4. パルガティワーディ・ユグप्रगतिवाद-युग (進歩主義時代)	40
最後に	42
第二章、インドに於ける俳句	45
一、タゴール	45
二、スブラマニア・バラティ	58
三、アッキエーエ	58
四、プロバカル・マチュウエ	74
五、サトヤ・ブシャン・ワルマ	75
六、ヒンディー語以外の詩人たち	97
七、現代インドにおける俳句研究	97
第三章、日本における韻文の歴史と芭蕉の文学史的位	99
第一節、韻文の歴史	99
(一)、歌謡の古体	99
(二)、古典歌謡—上代から室町時代に	99

第二節、芭蕉の生涯と作品	104
(一)、芭蕉の誕生と俳諧との関わり	104
(二)、江戸へ下る	105
(三)、旅の始まり	106
(四)、最後の旅	107
第三節、文学史における芭蕉の位置	108
(一)、和歌から俳諧へ	108
(二)、芭蕉の登場	110
(三)、芭蕉と文学	111
第四章、アツギエエと紀行文	113
第一節、インドにおける紀行文の歴史	113
第二節、アツギエエの紀行文	114
(一)、アツギエエの紀行文の『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』	114
(二)、アツギエエの紀行文の『エク・ブンド・サフサ・ウチリ』	128
第五章、『奥の細道』と『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』の比較	139
第一節、過去の著名な歌人	139
第二節、著名な遺蹟や遺構	145
第三節、各地の風俗（名所、花など）	148
第四節、歌枕	151
第五節、両作に詠まれた歌	159
第六節、両作に描写された人々との繋がり	168
第七節、旅への想い	179
第六章、松尾芭蕉とアツギエエ	183
第一節、俳句理解によるアツギエエの韻文の変遷	183
第二節、アツギエエの俳句理解	188
第三節、芭蕉とアツギエエの差異	192
終わりに	198
参考文献一覧	199

はじめに

本稿は、松尾芭蕉の『奥の細道』とアッギエーエ（1911～1987）の『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』を中心に取り扱い、作品の中で描かれた叙述や詩作を比較分析することにより、それぞれの作品の作者の思想的共通点を論じるものである。

筆者はこれまで、芭蕉の『奥の細道』における人間関係に着目し、松尾芭蕉の人間像を明らかにすることを目的とする研究を行ってきた。そして、その研究を発展させるために日印比較文学という方向性を模索してきたのである。

その中で現代インドの詩人アッギエーエの存在が浮かび上がってきた。インド文学界で詩人として高く評価されたサッチダーナンド・ヒーラーナンド・ヴァーツヤーヤン（1911年～1987年）はアッギエーエという詩名で知られ、韻文と散文の双方に多大な影響力を残した詩人である。アッギエーエは「長い詩」、「短い詩」、「チャンプ（散文と韻文が混ぜられた作品のこと）」といった幅広いインド韻文の領域で精力的に活動した。数多くの優れた詩集を出版するだけではなく、外国の文学から得た思想などもヒンディー語に導入するという、思想家、理論家としての側面も強かった。ヒンディー語の文学界で実験主義という潮流を作り出し、同時代における主導的な役割を果たした文学者としてインドでは知られている。

アッギエーエは訪日経験もあり、日本の文化に多大な関心を示していたのである。アッギエーエは詩だけではなく、小説、翻訳なども手がける優れた文学者であり、日本の俳句をインドに翻訳して紹介した数少ない人物の一人である。そのアッギエーエの紀行文『エク・ブンド・サフサ・ウチリ』において、芭蕉の句「やがて死ぬ、けしきは見えず、蟬の声」が翻訳・引用されている。

झिल्ली का अविरत उल्लास

देता है संकेत कहीं क्या उसे

मृत्यु है कितनी पास

『エク・ボンド・サフサ・ウチリ』 ページ 177

ここでのアッギエーエはヨーロッパの雪山において、厳粛な自然に囲まれていた。そして、この時の心情を表現するために引いてきた言葉が芭蕉の句なのである。つまり時代と場所は違っても、その幽玄に対する感性は共通していたということであり、両者には思想的な繋がりがあることを筆者は確信したのである。

筆者が研究対象として、アッギエーエを選んだきっかけは以上の通りではあるが、調査と読解を進めるうちに、両者の作品には対照的な共通点や相違点が見出された。中でも、芭蕉の『奥の細道』と同様に、アッギエーエが国内を巡回して書き上げた紀行文『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』の持つ意味は大きい。これらの作品では双方ともに、旅に出ることへの憧れから始まり、人生を旅と見立てて、生きている限りは旅が続くことを語って幕を閉じる。この旅と生とする人生観において両者は共通しており、またそれぞれの紀行文にも通じ

るものがあるのである。

従来の日印比較文学においては、仏教文学の研究が中心であり、それ以外の文学についての研究はあまり行われてこなかった。またインドにおける俳句の受容についての研究も、サトヤ・ブシャン・ワルマによる体系的な報告を除けば殆どなされてこなかった。現在においても、日本文化・文学を研究している機関は、ネルー大学とデリー大学がある。しかし、日本文学が専門の研究者は数える程しかおらず、韻文の研究者になると一層限られる。本稿における議論は、そうした問題に言及することで、両国の文学の関係の一つを明らかにするものとなるだろう。

本稿においては、まず第一章において、文学面から見たヒンディー語の歴史として、インドにおける言語と文学の変遷がいかんに行われてきたかを概観する。インド文学の歴史は韻文の歴史でもあり、言語の変遷の歴史でもあった。そうした歴史の流れの中で、アッギエーエの紀行文がどのような意味と立ち位置を有しているのか確認することができるだろう。

第二章においてはインドにおける俳句として、いかんにして俳句がインドで紹介されてきたかということ論じる。インドに初めて俳句を伝えたのはタゴール(1861～1941)である。ノーベル文学賞を受賞したタゴールは訪日した際に俳句と出会い、これまでにない形式の韻文詩として紹介した。続くアッギエーエもまた訪日した際に俳句と出会い、その五・七・五の形式に強く感化されている。彼は俳句の持つ僅かな言葉が実現する、豊かな情景の表現力に感動し、その詩情をヒンディー語で表現するために、詩人としての感性を駆使した。そして現代のインドにおける俳句の理論化に最も大きな貢献をしたのが、サトヤ・ブシャン・ワルマ(1932～2005)である。切れ字を翻訳で再現することを試み、また俳句の歴史を体系化して伝えるなど、学術的な文学としての俳句をインドにもたらした。

第三章では、芭蕉の生涯と『奥の細道』の概括を、第四章ではインドにおける紀行文とアッギエーエの作品である『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』と『エク・ブンド・サフサ・ウチリ』の内容の概括を行っている。

第五章では『奥の細道』と『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』の比較として、芭蕉とアッギエーエが詠んだ詩や紀行文のモチーフの共通点を分析・検証している。両者とも、詩歌の先人、遺構や自然、旅先での人々との出会いなどをそれぞれの作品で描いている。中でも重要な共通点は、旅に対する感情であり、双方とも旅を希求し、旅こそが人生の姿であるとしている。定住を拒み、常に移動し続けることが、自身の人生の在り方であり、そのための困難も厭わないという態度がはっきりと示されているのである。

第六章ではアッギエーエと俳句との関係を論じている。幼少期に言語の多義性を発見したアッギエーエは、後年俳句と出会うことで、少ない言葉による豊かな情景世界を表現しうること気づき、自身の詩作を発展させた。そうしたアッギエーエにとっての俳句とは、詩的な感性による詩情の表現に重点が置かれるものであった。アッギエーエと芭蕉の作品を比較すると、その傾向に幾分違いは見られるが、安住を拒む旅を希求する意識は、芸術の追

求に対するストイックな態度の現れであるという点において共通しているのである。

以上が本論の構成となるが、芭蕉とアッギェーエという二人の作家の間には、時代と国という二つの大きな隔たりがあるにも関わらず、その作品で描かれる内容には多くの点で共通点が見られる。以下の議論で、作品の内容を通じて、作家松尾芭蕉とアッギェーエの人生観と思想を明らかにしていくこととする。

第一章、文学面から見たヒンディー語の歴史

インド文明はインダス文明から始まった世界最古の文明の一つである。その地域は、現在のインド、パキスタン、アフガニスタンで、インダス河の周辺に紀元前 3300 年から紀元前 1700 年の間に栄えた。農業と水上交通による貿易に依存して繁栄したこの文明は、考古学上はハラッパーとモヘンジョダロと呼ばれた都市部が地殻変動によってインダス河の付近が砂漠化したことにより、衰えていった。更に、インド・ヨーロッパ族のアーリア人の侵入によって、住民の一部が現在の南インドに移住し、ドラヴィダ人と呼ばれるようになった。紀元前 2000 年頃、アーリア民族はインドの西北部に移住し、紀元前 1000 年頃には中央インドのガンジス河流域まで進出していた。

この頃、インドの最初の文書が作られ、インドの文学が始まったとされている。インドの文学は、使用言語によって大きく二つの種類、つまり、インド・アーリアン語とドラヴィダ語に分けることができる。現存資料では、ドラヴィダ語による文献は西暦以前に遡ることはできない。これに反して、インド・アーリアン語の文学の歴史は数千年前に遡って現在に至ることから、インドの主流文学として認められている。古代のインドの言語と文学は共に背景に宗教思想、つまりヒンドゥー教の思想などが中心的な柱となっており、この宗教思想が古代のヴェーダ文学、古典サンスクリット文学として書き記されている。更に、近世から現代までの文学の背景にも様々な宗教、つまりヒンドゥー教、仏教やジャイナ教等がまず存在しており、さらにイスラム教徒によるウルドゥー文学など、宗教教義を表す文字作品が他を圧して重要な位置を占めている。すなわちインド古典文学においては、文学としての価値以前に宗教思想が存在している。

ヒンディーという言葉はサンスクリット語のシンドゥーという言葉から取られたものである。元々シンド川（インダス川も）という川の名前であり、その周りの地域がシンドゥーという名前で知られていた。その後、南アジアでアラブ人によってイスラム教が導入されると、シンドゥーという名前で呼ばれていたこの地域はヒンドゥーと呼ばれるようになった。そしてこの地域で話している言語もまた、ヒンディー語と呼ばれるようになった。

現代も使われているヒンディー語の起源を探すと、ヴェーダ時代まで遡らなければならない。サンスクリット語を用いているリーグヴェーダにヒンディー語の文学的な形式が既に見られ、それが時代の推移に随ってサンスクリット語から分化し、現在のヒンディー語まで辿り着いたと言える。これは他の言語に余り見かけない現象ではないだろうか。例えば、古代日本語は現代日本語とは異なる性格があってもやはり日本語であり、その言語的特質は現在に至っても日本語として受け継がれている。けれども、ヒンディー語の大古代の様式はヴェデッキ語、古代にサンスクリット語、上代にプラークリット語、中古にパーリ語、中世にアプブランシャ語、近世からヒンディー語と呼ばれるように、言語的に時代によって大きく変質しているのである。

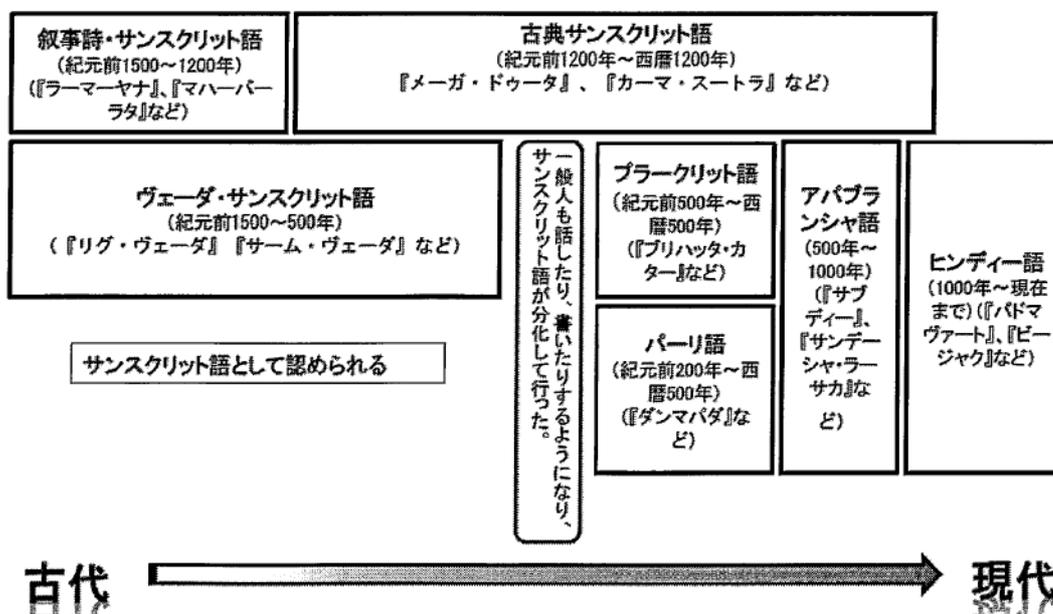
インドの文化や社会を良く理解するためには、まずヒンディー語の由来を知るべきだと

私は考える。しかしながら、ヒンディー語で書かれた文学の歴史について、日本で刊行された参考文献は少ない。たとえば田中於菟弥著『世界の文学史 9、インドの文学』（昭和十二年十一月二十日初版刊行、明治書院）、ルイ・ルヌー著、渡辺重朗／我妻和夫共訳『インドの文学』（1996年1月20日刊行、白永社）位しか挙げられないのである。両作ともインド文学の歴史（インドに様々な言語があり、随って文学も多くの種類があること）を中心に述べているが、ヒンディー語の文学の歴史を中心に置いたものではなく、古代のサンスクリット語が分化・変遷によって現在のヒンディー語まで辿り着いたことが判然としない。更に、サンスクリット語の中に見られるヒンディー語の由来、又は、ヒンディー文学に与えたサンスクリット語の影響などは両作の中心のテーマとはなっていない。本論では日本文学との比較研究の爲の基本事項として、インド人としての立場から、ヒンディー語の歴史をそこに記された文学事項を中心に語って行きたい。

その前段階として、ヒンディー語が母語でない人のため、インドの言葉であるヒンディー語の変遷をまず、説明しておく。

なお、ヒンディー語の変換を下記のように大まかに図示しておく。太字が言語名、そして下行に入れたのが、その言語が書かれている文献名である。

ヒンディー語の歴史



(一)、文字の変遷

上記の図に沿って説明を加える前に、古代インドから近代までの民族の状況を語っていききたい。古代アーリアン民族はインダス川に辿り着いた時点でヴェーダなどの文献を持参してきたわけではない。けれども、彼らが持ってきた知識はヴェーダとして収録されるに至った。それ以前のヴェーダの知識は、聖仙から弟子へと口承によって伝承され保護されてきたものである。

一方、インダス川に以前から住んでいたインド人（現在では南インドまで居住地域を変更させられたと推測）は自らの文字を持っていたが、それらの文字は現代になってから解読された。けれども、古代から現代までに続く文献はなく、文学的な歴史を確認することができる文字ではなかった。

他方、アーリアン民族によって伝えられて来たヴェーダはヴェーダ・サンスクリット語で収録され、その表記に使用された文字はブラーフミー文字であった。ブラーフミー文字という呼び方は、インド社会では古くて分からないものをブラフマー（創造の神）の名前で呼ぶ習慣があったからである。ブラーフミー文字の起源はインド・ヨーロッパ系文字の一種であると推定されている。

ブラーフミー文字	→	𑀀	𑀁	𑀂	𑀃	𑀄	𑀅	𑀆	𑀇	𑀈
デーヴァナーガリー文字	→	अ	आ	इ	उ	ए	ओ	अं		
		𑀉	𑀊	𑀋	𑀌	𑀍	𑀎	𑀏	𑀐	𑀑
		क	ख	ग	घ	ङ	च	छ	ज	झ
		𑀒	𑀓	𑀔	𑀕	𑀖	𑀗	𑀘	𑀙	𑀚
		ट	ठ	ड	ढ	ण	त	थ	द	ध
		𑀛	𑀜	𑀝	𑀞	𑀟	𑀠	𑀡	𑀢	𑀣
		प	फ	ब	भ	म	य	र	ल	व
		𑀤	𑀥	𑀦	𑀧	𑀨	𑀩	𑀪	𑀫	𑀬
		श	ष	स	ह	का	कि	की	कु	कू
		𑀭	𑀮	𑀯	𑀰	𑀱	𑀲	𑀳	𑀴	𑀵
		के	को	कू	त्र	त्वा	म्य	द्दि	व्यो	स्ति
		𑀶	𑀷	𑀸	𑀹	𑀺	𑀻	𑀼	𑀽	𑀾
		स्ना	आ	यं	भुं	स	ख	दो	वे	

イメージは भारत कोश (पारलट・कोशु) というインド文学団体のインターネット百科事典から

ブラーフミー文字の発生は紀元前 10 世紀頃だと推測されているが、ブラーフミー文字の黄金期はアショーカ王（紀元前 304 年～232 年）の時代にあった。前 3 世紀頃のブラーフミー文字が碑石として石に刻まれたアショーカ法勅が、現在でも残されている。

当時、ブラーフミー文字はランカー（現在のセイロン島）を初め、東南アジアの国々まで伝えられ、諸国の文字に影響を与えた。ブラーフミー文字は、後述する初期のプラークリットとパーリ語でも使われていた。

ブラーフミー文字は様々な文字、つまりベンガル語の文字、タミル語の文字、シンハラ語の文字、チベット語の文字などに分化していったが、その中で最も有名なものはデーヴァナ

ーガリー文字である。デーヴァナーガリーは西暦7世紀頃に「ナーガリ」（都市で使われる文字）として進化し、サンスクリット語で使われた時に「デヴァ」（神）という接辞語が加えられ、デーヴァナーガリーとして呼称された。このデーヴァナーガリー文字は、サンスクリット語、パーリ語、プラークリット語でも使われた。更に、現代のヒンディー語、マラーティー語、ネパール語などにも用いられている。

今まで、インドの文字の推移を見てきたが、この先は、インドの言語の変遷を文学的な面を中心に説明して行きたい。

（二）、言語の変遷

様々な言語と多様な宗教を持ち、特異性に富んだ国とされるインドの文学は、他国のように歴史事項に添って単純に表すことができない。数千年の歴史を持っているインド文学は実に複雑である。特に古典作品の場合、その作の中心が宗教思想にあることから聖典と呼ぶべきなのか、それとも一般的な文学作品として評価すべきなのか、両方の間に線を引くことはなかなか難しい。たとえ外見的に一般的な作品に見えても、その基底には宗教的なテーマを確固として保持しているからである。

インド文学はサンスクリット語から始まるが、当時のサンスクリット語が用いられるのは聖仙と寺院の屋敷内に限られ、サンスクリット語を使いこなす教育を受けた人は宮廷と関係する地位のみであり、身分高いヒンドゥー教の司祭階級のバラモンと、宮廷に属している王族・武人階級のクシャトリヤに限られていた。

聖仙と国王は交互に円滑な関係を保ち、聖仙は聖典を人々に解説すると同時に、一般的な作品もその中に宗教的な思想や背景を持たせて執筆していた。人民の生活の中に宗教は深く浸透しており、それを排して身分社会の中で生きていくことは不可能な時代であった。当時の作品であるヴェーダでは、様々な状況に当てはまる神々の存在が謳われ、それに対しての祭式、賛辞、祭典などを示す作品となっている。

インド・イラン語派のヴェーダ語はインド社会と接近する中で、変化を求めていった。その変化は、サンスクリット語文法学者であるパニニ（紀元前6世紀頃）によって、規則性を規定されることになった。古典サンスクリット語は、ヴェーダ・サンスクリット語とは音韻、文法、構文、語彙ともに異なっている。古典サンスクリット語が成立した後、宮廷では娯楽的な文学を執筆する学者も登場した。その一人として詩人、劇作家のカーリダーサ（4世紀頃）の名前が挙げられる。この時代になると、文学の享受者は人民の中の上流階級の有識者も含まれたが、古典サンスクリット語の文学にも宗教的な思想や価値観は大きく存在しており、宗教的な影響はまだ非常に強いものであった。

古典サンスクリット語では、12世紀まで新しい作品が書き続けられた。12世紀のジャヤデーヴァはサンスクリット語の有名な詩人であった。なおサンスクリット語は近代・現代に至ってもなお言語として生き残っているが、インド文学界において傑出した作品が新たに登場する例は見られない。

サンスクリット語の次にプラークリット語が登場した。プラークリットは「自然」という意味を持ち、人民の中から生まれたと思われる。当時のサンスクリット語は司祭階級のバラモンによって独占されていたが、プラークリット語は武人階級のクシャトリヤが使用できるようにサンスクリット語を分化させ、構成したものである。プラークリット語の起源はマガダ国（現在ビハール州にある）であり、そこで語られている言語のマガディー語から影響を受けたことから、半マーガディー語とも呼ばれている。そして、パーリ語も紀元前2世紀頃に同じようにマガダ国に起源を持ち、プラークリット語の一族として認められている。なお、パーリ語はプラークリット語族の文学的な言語として使用されたとも言われる。

両者の文献は宗教的な聖典で、インド全体のみならず海外でも知られるようになった。仏教の経典は人民に伝えるためにパーリ語で書かれており、原始仏典の一つである『ダンマパダ』はパーリ語の最高の例である。そしてプラークリット語はジャイナ教と仏教によって広がった。一つ強調しておきたいのは、プラークリット語の方がパーリ語よりも人民の中により普及していたことである。その結果、仏教的な作品もパーリ語の次にプラークリット語を用いて多く書かれた。そして、当時の強力な王であるアショーカ王が仏教に改宗したことで、仏教はインドでも強い勢力を持つようになり、国外まで伝わった。

一方、プラークリット語は宗教以外の文献にも用いられ、特に、戯曲にはサンスクリット語と同時にプラークリット語が使われていた。

アパブランシャ語はプラークリット語の9割の単語を持ち、文法は更に進化したものである。アパブランシャ語はサンスクリット語で「破損した言語」の意味を持っている。この言語が発生した背景にはインド社会ではアーリア人、ドラヴィダ人、キラート族、ニシヤード族、モンゴル族が一緒に住み、新しい文化を生み出したことがある。このさまざまな族が参入していた武人階級のクシャトリヤが、シンド（現在パキスタンの一つの州）からパンジャーブ（現在インドの一つの州）までの国土で政権を握り、強い力を持っていた。王に属する言語ではなく一般人の言語を使用する彼らは、文化や文学に強い興味を持っており、豊富な社会を代表していた。けれども、文学的な言語として用いられてきた特権階級の使用するサンスクリット語の知識がなかったため、プラークリット語を発達させてアパブランシャ語を生み出していった。これらの言語は当時の様々な宗教派、つまりシッディー派、ジャイナ教派、ナート派などに使われ、人民まで拡大された言語となった。

一方、712年、アラブ人であるモハンマド・ビヌ・カーシム（695年～715年）がインドを支配し、シンド・パンジャーブのヒンドゥー教の最後の王であるダーヒル・セーン（661年～712年）を敗った。これは、イスラム教がインドに導入されるきっかけとなり、以後、イスラム教が人民の間に徐々に広がっていった。イスラム教の学者たちはサンスクリット語の知識を持っていなかったため、アパブランシャ語をインドの言語として取り扱い作品を執筆し始めた。これはイスラム教の学者の、インド文学界に於ける最初の登場だった。結果として、アパブランシャ語の地位を押し上げ、文学的な言語として認定さ

れるようになった。更に、新しい韻文形式のドーハー（四つの文章が13字—11字—13字—11字で構成される短詩型）が生み出され、巷間に大幅に流行した。

8世紀頃シンドに導入されたイスラム教は、アフガン系民族とトルク系王朝からなるデリー・スルタン朝（1206年～1555年）を成立させ、国土はアフガンから南インドまで広がった。この時期、インド社会は文化や文学に大きな変革を体験した。

これらの出来事は、インドの言語にも影響を与えたのである。アパブランシャ語にはアラビア語、パシュトー語、ペルシア語、トルコ語の単語が取り込まれた。そして、デリーの周囲の地域の人民の言語であるカリー・ボリー語と混ざりようになり、アパブランシャ語はヒンダーヴィと呼ばれた。ヒンダーヴィはアラビア語で「インドの言語」という意味を持ち、これはイスラム教が与えたインドにある言語に対しての呼称だった。ヒンダーヴィ語は、後代の学者によってヒンドウスターニという名前で呼ばれた。この言語は17世紀になってからムガル帝国によって宮廷の言語としての威信を獲得し、ウルドゥー語と呼ばれた。とはいうものの、学者達はまだヒンドウスターニという名前を使用し続けていた。

近代になると、ヒンドウスターニが二つの派に分化し、一つはウルドゥー語、もう一つはヒンディー語になった。更に、ヒンディー語は、サンスクリット語の単語と文法などを出来る限り組み込みながら標準化され、文学的な言語として用いられるようになった。

以上がインドの文字と言語に見られる変化の概況であるが、これから、各言語で書かれたインドの文学を中心に、サンスクリット語がヒンディー語になるまでの変遷を、図「ヒンディー語の歴史」に沿って説明して行きたいと思う。

一、ヴェーダ・サンスクリット語

四千年前、インド・イラン語派の祖語は様々な言語に分化していたが、その中でもっとも古いものはヴェーダ・サンスクリット語あるいは単にヴェーダ語と呼ばれるサンスクリット語である。このヴェーダ語はアヴェスタ聖典（ゾロアスターン教の聖典）と文法的に類似しており、インドのアーリアンとイランのアーリアンの文化や文学的な接近が伺える。

古代のインドの文学、すなわちヴェーダとは「知る・知恵」という意味の動詞「^{vid}विद्」という言葉に由来し、宗教的な知恵や知ることに基づいた聖典を指したものである。そしてそのヴェーダに使われている言語が「ヴェーダ語」と呼ばれるものである。

ヴェーダの構成

ヴェーダは大幅に二つ、**श्रुति**（シュルティ）と**स्मृति**（スムリーティー）に大別される。

シュルティの意味は「聞いて取得すること」である。古代の聖典は口伝によって語られ、その内容が弟子に暗記されて来たことからシュルティと言われている。シュルティは四つのヴェーダ、つまり『リグ・ヴェーダ』、『ヤジュール・ヴェーダ』、『サーマ・ヴェーダ』と『アタルヴァ・ヴェーダ』から成る。更にこのヴェーダはそれぞれがサンヒター、ブラーフ

マナ、アーラヌヤカ、ウパニシャッドという四つの段階に別れる。サンヒターはヴェーダの主要部分で賛歌、歌詞、祭詞などと言われ、マントラとも呼ばれる。ブラーフマナは散文で、哲学思想を展開し、本書の説明と解釈を述べる文献である。アーラヌヤカはブラーフマナとウパニシャッドの中間に位置し、伝授される秘義、秘法を含んだ文献を指す。ウパニシャッドはヴェーダの結尾に置かれ、散文と韻文、あるいはそれが混交した文章から成っている。

スムリーティーは宗教的な価値がシュルティより劣り、師伝口授による知識を意味する。スムリーティーには、六種のヴェーダダンガや二大叙事詩の『ラーマーヤナ』、『マハーバーラタ』や『マヌ・スムリーティー』がある。

四種のヴェーダの第一段階、サンヒター

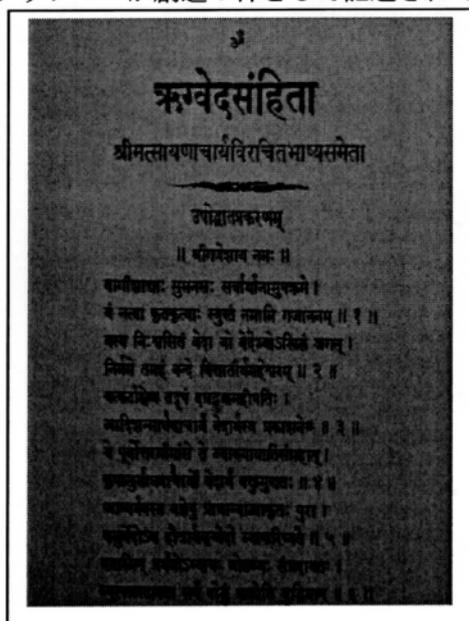
四つのヴェーダの中で一番古くて重要なヴェーダは ऋग्वेद『リグ・ヴェーダ』である。ऋग+वेद (リグ+ヴェーダ) は複合語で、リグの意味は賛美、ヴェーダは知識を意味する。

一方、四つのヴェーダはそれぞれ四部分に別れており、それらの部分は共通した名称で呼ばれている。その一つがサンヒターである。サンヒターは他の三つの部分より重要で、ヴェーダを成立させる最大の要素である。

『リグ・ヴェーダ』はインドの初めての文学として認められ、宗教と神話が中心となっている作品である。この宗教と神話が文献の中心であることは、当時のインドの文学における顕著な特徴である。当時の宗教は多神を信じ、信奉者は各神に対して礼讃する美の賛辞を詠む。そして、各神はそれぞれの領域で最高神の地位を持ち、それぞれの神が固有の特徴を示す。例えば、天界では太陽神のスールヤの名があげられ、空界では雷神のインドラがあるが、これらは悪魔から人間界を保護する神である。また地界にある火神のアグニ、友愛の神ミトラ、日本にも伝えられている七福神の一柱のモデルとなった学問の女神サラスヴァティー、そしてこの女神の夫であるブラフマーが創造の神として記述されている。

(デーヴァナーガリー文字で書かれた『リグ・ヴェーダ』)

『リグ・ヴェーダ』、ヴーエディーカ・サムソダーダナー・マンダル出版、インド、1995年から取った写真



リーグ・ヴェーダの内容は宗教的叙情詩、宗教的賛歌、婚姻、葬送、人生に関する歌、哲学詩、戦争の歌などが含まれた作品である。全構成は10巻から出来ていて、第1巻と第8巻は火神への賛歌集が収められ、第2巻から第7巻まではリグ・ヴェーダの中心的な部分で家伝賛歌集となっている。第9巻は神に捧げる酒、いわゆるソーマの賛歌が集められている。第10巻は、哲学的な賛歌が新しい言語によって収められている。この言語はサンスクリット語であるが、イランのアヴェスタ聖典の言語と似る。

一方、文法的にはパーニニ（紀元前5世紀頃に生まれた文法学者であり、古典サンスクリット語を確立した）によって確立されたサンスクリットの文法と区別されることから、ヴェーダ・サンスクリット語と呼ばれるようになった。そしてこれまでのパーニニの文法によるサンスクリット語は区別して古典サンスクリット語と呼ばれ、ここで、初めての言語の移り変わりが文献上に見出されたのである。リグ・ヴェーダの成立は紀元前1500年～1000年頃と推定されている。

第二のヴェーダ **यजुर्वेद** 『ヤジュル・ヴェーダ』は、**यजुस+वेद** (ヤジュス+ヴェーダ) を合わせた単語である。日本語訳すれば、ヤジュスというのは祭式において使われる祭詞のことを示す。40巻に成る『ヤジュル・ヴェーダ』の各巻が儀式による祭詞や作法などを記している。また、形式によって『黒ヤジュル・ヴェーダ』『白ヤジュル・ヴェーダ』の二種に大別される。年代的に『黒ヤジュル・ヴェーダ』の方が古い。『ヤジュル・ヴェーダ』は韻文と散文で作成されているが、韻文の大部分は『リグ・ヴェーダ』から借用されていると言われ、対して散文の方はこのヴェーダ独特のものであるが、使用言語はヴェーダ・サンスクリット語である。

『黒ヤジュル・ヴェーダ』はこの文献の本来の形式を示すもので、祭詞とその説明が結合されている。『黒ヤジュル・ヴェーダ』は四つの分派、つまりマイトラーヤニーヤ派、チャラカ・カタ派、カピシュタラ・カタ派、タイトティリーヤ派に区別されている。

『白ヤジュル・ヴェーダ』は『黒ヤジュル・ヴェーダ』より新しく、韻文と散文の祭詞が中心的に収められている。そして、ヴァーージャサネーイン派が『白ヤジュル・ヴェーダ』を代表し、更にマーディヤンディナ派とカーンヴァ派に分類される。このヴェーダの成立はおおよそ紀元前1000年から紀元前800年頃と想像されている。

第三のヴェーダとして、**सामवेद** 『サーマ・ヴェーダ』がある。これは **सामान+वेद** (サーマン+ヴェーダ) の熟語で、サーマンというのは祭式に於いて歌を詠むこととヴェーダは歌を詠む知識のことを示すので、『サーマ・ヴェーダ』は歌を詠むヴェーダである。このヴェーダの重要性は、リグ・ヴェーダの次に次ぐとされているが、巻数は四つのヴェーダのなかで最小である。『サーマ・ヴェーダ』のサンヒターは「アールチカ」と「ガーナ」二つの部分に分類され、1549詩句が収録されている。けれども、これらのう

ち75詩句だけが『サーマ・ヴェーダ』独自のもので、他はすべて『リグ・ヴェーダ』から再録されている。

『サーマ・ヴェーダ』は、文学的や思想的な価値では他のヴェーダと比べると、それほど大きなものではない。使用言語は、他のヴェーダ同様に、ヴェーダ・サンスクリット語である。このヴェーダには祭式における歌詞を集めたものがあり、歌曲に適応させる音符なども示されているので、音楽史上極めて重要であり、インド最古の典礼音楽として知られている。『サーマ・ヴェーダ』は紀元前800年～600年頃のものだと推定されている。

अथर्ववेद 『アタルヴァ・ヴェーダ』は**अथर्व+ वेद** (アタルヴ+ヴェーダ) の単語を合わせたもので、アタルヴは聖仙、ヴェーダは知識なので、アタルヴが伝えられた知識という意味である。

アタルヴァ・ヴェーダは四番目のヴェーダで、古くアタルヴァ・アンギラスとも呼ばれていたが、それはアタルヴァンという種族とアーンギラサという種族によって伝えられたヴェーダだったからである。このヴェーダは内容的に、医学、男女の愛情、悪魔、国王法、調和などに分類される。そして、このヴェーダは『リグ・ヴェーダ』と『サム・ヴェーダ』からも内容を採録し、成立時期は紀元前800年～600年前後だと推測されている。

『アタルヴァ・ヴェーダ』は最後のヴェーダとして成立し、古く9派に分類されていたが、現在知られているのは、シャウナカ派とパイッパラダ派という二派に限られる。両派は20巻を持つが、内容的には異なっている。20巻には賛歌として約六千の詩句が載る。『アタルヴァ・ヴェーダ』での散文は、全体の約六分の一を占めている。使用言語は、これもヴェーダ・サンスクリット語である。

ヴェーダの他の段階、ブラーフマナ、アーラヌヤカ、ウパニシャッド

ヴェーダ文献の第二段階に、ブラーフマナが位置するが、これはサンヒターの説明的な文献である。ブラーフマナ文献では、マントラの祭詞・歌詞・讃誦の注釈がなされている。ブラーフマナ部分は、三つのヴェーダではサンヒターから独立しているが、『ヤジュル・ヴェーダ』では祭詞の部分に含まれている。そこでブラーフマナは『ヤジュル・ヴェーダ』を基礎として発達し、後に他のヴェーダにも追加されるに至ったと推測される。現存するブラーフマナは合わせて19編あり、2編は『リグ・ヴェーダ』に、6編は『ヤジュル・ヴェーダ』に、10編は『サーマ・ヴェーダ』に、1編は『アタルヴァ・ヴェーダ』にある。ブラーフマナの正確な成立年代は不明だが、紀元前800年を中心に作られたと推定されている。

ブラーフマナは散文で書かれ、ヴェーダ祭式の研究には必須の文献である。そして、神話・伝説の文体と実際に行われている供儀の関係が説明されており、ヴェーダに含まれている神話の解釈も載る。シャタパタ・ブラーフマナはブラーフマナ文献で最も重要な文献であり、その思想は典型的な超論理、すなわち有名な伝説である「マヌ」と「大洪水物

語」が含まれている。「マヌ」はインド神話の登場人物であり、「大洪水」で文明が破壊される神話を指す。

アーラヌヤカはヴェーダの第三段階に位置し、同時にブラーフマナの最後の章を形成している。この章は祭式の神秘的意義を説くものでありながら、哲学思想としても高度な内容を持っている。内容はブラーフマナと同じく祭式に関するもので、神聖なものとして扱われている。アーラヌヤカを直訳すれば「森林書」の意味を持つ。これは森林の中で伝授、学習されるべき秘儀があることから命名されたと推測される。成立は紀元前 600 年だと言われる。現存するアーラヌヤカの 2 編は『リグ・ヴェーダ』に、4 編は『ヤジュル・ヴェーダ』に、2 編は『サーマ・ヴェーダ』に存在するが、『アタルヴァ・ヴェーダ』にはない。

ウパニシャッドはヴェーダの最後の部分に属する。「ウパ・ニ・シャッド」を直訳すれば、三つの単語、すなわち「近く・下・座る」となり、「(師に) 近づき、その下に座る」という意味となる。これに説かれる教義は神秘的なもので、師弟が相対座して口授される秘儀に基づいたものである。

ウパニシャッドは約 200 書の書籍のことである。ウパニシャッドでは、崇拜、礼拝、宗教儀式などが、一神教の教えに基づいている。韻文と散文の構成で作られたウパニシャッドは、その中の 108 書が紀元前 6 世紀頃に成立した伝統的な仏教以前のものとされ、「古いウパニシャッド」と呼ばれる。それ以後のものは「新ウパニシャッド」と呼ばれる。「古いウパニシャッド」が、もちろん内容的に重要である。

二、叙事詩・サンスクリット語

叙事文学は古代のヴェーダ文学と中古の古典サンスクリット文学の間の時期に隆盛し、代表作品は『ラーマーヤナ』と『マハーバーラタ』が著名である。聖仙（インド神話の賢者）のヴァールミーキによって書かれたこの二つの叙事詩は、ヒンドゥー教にとってはヴェーダの次に重要な聖典である。『ラーマーヤナ』の成立についての説は定まっていないが、研究者によると紀元前 600 年頃とも推測されている。この二つの叙事詩の思想的・文化的な影響は、インドを初めアジア諸国にも及んでいる。

以下に二つの叙事詩の内容を記す。

叙事詩『ラーマーヤナ』

『ラーマーヤナ』は、ヒンドゥー教の神話と古代英雄であるコーサラ国のラーマ王子の伝説で、七編、二万四千詩句から成るサンスクリット語の大叙事詩である。七編からなる『ラーマーヤナ』の中で、第一編と第七編は、二世紀になってから新しく追加されたとも言われている。この叙事詩では、ラーマ王子がヴィシュヌ神の権化として取り扱われていることから、宗教的な意義も持っている。

『ラーマーヤナ』第一編は幼年の巻と呼ばれ、ラーマ王子と他の四人の王子が誕生し、成長の後にラーマ王子がシーターと結婚するまでが書かれている。

第二編はアヨーディヤーの巻と呼ばれる。ラーマの父のダシャラタ王は老齢に達し、ラーマに王位を継がせようと決意するが、王の第二番目の妃がラーマを十四年間、森林に追放させる。ラーマはシーターともう一人の王子のラクシュマナを伴い、森林に赴く。

第三編はアラヤカ、または森林の巻と呼ばれる。ダンダカの森に来たラーマは森の静寂を乱す悪魔を追いかけ、魔王のラーヴァナの怒りを引き起こす。ラーヴァナはラーマの妻のシーターを誘拐し、ランカー（現在のセイロン島）に連れて行った。ラーマは怒り悲しみ、シーターを捜索する旅に出る。

第四編はキシキンダーの巻と呼ばれる。ラーマは猿王スグリーヴァと親交を結び、猿族はシーターを捜す約束を交わす。四方を捜索した猿軍はシーターの所在を見つけた。

第五編はスندگانの巻である。海岸に着いた猿軍のハヌマーンは海を隔ててランカに着き、シーターと会う。ハヌマーンは敵に捕まるが、ランカの都市を炎上させて帰還した。

第六編はユダ、または戦闘の巻である。ラーマは猿軍と共にランカを支配し、ラーヴァナとの間に大戦争が起きる。ラーマはラーヴァナをついに殺し、シーターと共にアヨーディヤーの都に帰還した。

第七編はウタラの巻である。国民の間にシーターの潔白を疑う声が起こり、シーターはラーマのもとを去って森に行き、二人の子を生んだ。その後、シーターは身の清浄を証明するため大地に呑まれてしまった。ラーマも王位を去り、天上に昇っていった。

叙事詩『マハーバーラタ』

『マハーバーラタ』は紀元前6世紀頃の成立と思われ、18編、10万詩句から成る。サンスクリット語で書かれた『マハーバーラタ』の作者は不明であるが、聖仙のヴィヤーサだと言われている。

『マハーバーラタ』は、敵対関係にある二つの王族の物語を描いた神話である。ドゥルヨーダナが指揮する百人のカウラヴァと、彼の五人の兄弟のパーンドヴァが対立していた。双方はインド全土と隣接する多数の国から集まった部族とおのおの同盟を結び、戦闘に備えていた。英雄たちは戦闘の中で次々に戦死し、カウラヴァの長兄ドゥルヨーダナも殺された。最後にパーンドヴァが勝利するが、しばらく後に都を去ってヒマラーヤ山に向かった。そこで、不思議な死を迎え、この世界を去っていった。

第一巻はアーディ・パルヴァと呼ばれ、マハーバーラタの紹介と王子達の誕生と成長が述べられている。

第二巻はサバ・パルヴァと呼ばれ、パーンドヴァの森林に向けての出発が語られる。

第三巻はアルヤンカ・パルヴァと呼ばれ、パーンドヴァの森林での12年間のことが物語られている。

第四巻はヴィラト・パルヴァと呼ばれ、ヴィラトの皇帝となったパーンドヴァの事蹟が述べられている。

第五巻はウッドグ・パルヴァと呼ばれ、戦争の準備のことが記されている。

第六巻はビスマ・パルヴァと呼ばれ、戦争の始まりが書かれている。

第七巻はビスマ・パルヴァと呼ばれ、戦争が継続し、ドラナが大将になる。
第八巻はカルン・パルヴァと呼ばれ、戦争が続き、カルンが大将となった。
第九巻はシャルヤ・パルヴァと呼ばれ、戦争の終わりが描かれている。
第十巻はサブティック・パルヴァと呼ばれ、パンドヴァの軍人たちが殺される。
第十一巻はスティリ・パルヴァと呼ばれ、死んだ軍人達を悼む内容。
第十二巻はシャンティ・パルヴァと呼ばれ、パンドヴァの長男が王位になる。
第十三巻はアヌサシャヌ・パルヴァと呼ばれ、ビスマの最後の教えが書かれる。
第十四巻はアスワメディカ・パルヴァと呼ばれ、アスヴァ・メダーという行事が記されている。

第十五巻はアスラムヴィカ・パルヴァと呼ばれ、カウラヴァの残りの家族が森林に赴く。

第十六巻はマウサル・パルヴァと呼ばれ、紛争がまだ続いている。

第十七巻、第十八巻はパンドヴァの天国までの旅のことが述べられている。

『マハーバーラタ』は『ラーマーヤナ』に倍する大長編であり、神話、伝説、説話あるいは哲学詩などが結合されており、宗教的な思想なども含まれている作品である。

なお、ヒンドゥー教の重要な聖典の一つである神の詩『バガヴァット・ギーター』は、『マハーバーラタ』の一部である。サンスクリット語で書かれているこの作品は、仏教やジャイナ教の文学、ドラヴィダ語やヒンディー語の文学として取り扱われる場合がある。そして、インド以外の諸国にも『マハーバーラタ』の一部が散文化されて伝わっている。

三、古典サンスクリット語

ヴェーダのサンスクリット語は次第に変化し続け、紀元前5世紀にガンダーラ（現在のパキスタン）に生まれたパーニニによって、サンスクリット語の文法書であり、また『パーニニ文典』としても知られる『アシュターディーヤーイー』が成立した。『アシュターディーヤーイー』は「八個の章」の意味で、古典サンスクリット語の基礎を確立した。この文法はその後、三段階を経て完成する。第一段階はパーニニのサンスクリット文典、第二段階として紀元前2世紀に生まれた文法学者であるパタンジャリの注釈書『マハー・バーシュヤ』、第三段階は西暦5世紀に生まれたサンスクリット語文法学者であるバルト・ハーリの単語と文書の論文書『ヴァーケヤ・パデレヤ』である。この後にも、第四段階として、西暦650年頃に生まれた二人の文法学者であるジャヤディティヤやヴァマーナによる、カーシ（現在のワラーナシー）で使われる言語の構成についての解説書の『カーシカー・ヴリッティ』などの注釈を経て、サンスクリット語の文法理論が最終的に完成するのである。その標準文法は現在に至るまで、文学、宗教、哲学、学術書の基礎として改変されることなく使用されている。

サンスクリット語はヴェーダ文学、二大叙事詩を経て、古典サンスクリット文学に至った。叙事詩時代の詩はこの古典サンスクリット語の時代に大きな影響を与え、カーヴィヤ

文学を輩出した。これらの文学では以前に比して内容も著しく充実し、多数の作家を現出した。

カーヴィヤ文学

「カーヴィヤ」とはサンスクリット語で書かれた韻文中心の文学作品のことである。カーヴィヤの起源は大叙事詩にあると言われ、その後、叙情詩、説話、詩論、戯曲などの発達を大きく促した。カーヴィヤ文学は二つの文体に区別される。一つは「ヴァイダルビー体」と言われ、内容的に重視される部分に使われて平調、優雅を重んずるのに対して、「ガウディー体」というもう一つの文体は音韻に重視を置き、長い合成語を好む傾向がある。

アシュヴァゴーシャ（80年～150年）は、北インドに生まれた仏教詩人、学者であり、インド最初の戯曲家である。仏陀の誕生から死に至るまでの生涯を描いた叙事詩『ブッダチャリタ』は代表作であり、仏教世界に多大な影響を与えた。十七章から成る『ブッダチャリタ』は古典サンスクリット語の優れた叙事詩として知られている。

又、4世紀に生まれたカーリダーサはインドのシェイクスピアとも呼ばれ、インドの古典サンスクリット語に於いて最も有名な詩人である。カーリダーサは多くの作品を執筆しているが、その代表作は二編の叙事詩『クマールサンバヴァ』(ヒンドゥー教のパールヴァティー女神の誕生から始まって、女神の新婚旅行に締め括られている作品)、と『ラグヴァンシャ』(ラグ王家の物語)、二編の叙情詩『メーガドゥータ』(鬼神のヤクシャが愛人に宛てて雲で伝言を送る物語)と『リトゥサンハーラ』(六つの季節に渡る男女の恋愛詩集)、そして三編の戯曲『シャクンタラー』(マハーバーラタの登場人物のシャクンタラーの物語を戯曲化したもの)、『マーラヴィカークニミトラ』(アグニミトラ王とマラヴィカの恋愛物語を戯曲化)と『ヴィクラモールヴァシーヤ』(ブルーラヴァス王と天女のウルヴァシーの恋物語を戯曲化)であり、これら多くの作品の作者としてインド文学史上で稀有な作家とされている。

叙情詩の『メーガドゥータ』(日本語訳『雲の使者』)は4世紀～5世紀頃に書かれたカーリダーサの代表作である。111詩句から成る『メーガドゥータ』の内容は、ヤクシャの男が、雨季の空を眺めつつ故郷に独り寂しく夫を待つ愛妻を想い、その恋慕の心を雲にたとえて描写している作品である。この作品はインド詩壇に於いて高く評価され、ドゥータ(使者)文学(使者を通じて思いを伝える内容を持つ作品)を生み出した。作品の人気はインドに留まらず、アジアの国々をはじめ西洋まで達したと言われる。

カーリダーサの出現によってインド文学の芸術性が高まり、古典サンスクリットの黄金時代とまで呼ばれた。その後、他の作家たちによって叙情詩、戯曲と新形式の散文の伝奇小説や説話なども多数作られ、また詩論や戯曲なども発達していった。

以下に、古典サンスクリット語で書かれた各ジャンルについて、まとめておく。

叙情詩

叙情詩では、恋愛、自然風景、宗教詩などを主題とするものが詠まれた。主な作家を取り上げておく。

バルトリハリは5世紀に生まれ、叙情詩と教訓詩の作家として認められた。バルトリハリが執筆した三種のシャタカ（百韻の詩集）は高く評価され、カーリダーサとも比較される程であった。特に恋愛を主題とした『シュリンガーラ・シャタカ』（恋愛百頌）が、優雅な詩句を生み出した作品として著名である。

ジャヤデーヴァは、12世紀にオリッサ州に生まれた詩人である。彼の名作『ギータ・ゴヴィンダ』は十二章からなる恋愛叙情詩である。ギーダは「歌」を意味し、ゴヴィンダは「牧牛者」という意味である。その牧牛者はクリシュナというヒンドゥー教の神であって、牧女のラーダーはクリシュナの恋人である。この作品では、二人の関係を題材に官能的な愛の詩が美しく歌いあげられている。ここに描かれる性愛への熱情はヒンドゥー教のエロスの熱情をともなうバクティ（信愛）を象徴的に表現するものとして広く受け容れられ、人々に大きな影響を与えた。

インド最初の叙事詩である『ラーマーヤナ』は、既に述べたように古典サンスクリット語の起源となったが、この伝統を継いだサンスクリット語の叙事詩仏教詩人アシュヴァゴーシャ、叙事詩のカーリダーサが出たのち、バーラヴィが登場した。

バーラヴィは叙事詩『キラタールジュニーヤ』を510年に執筆した。18章からなる本作の題材は『マハーバーラタ』からの影響を受けており、勇士のアルジュナ王子とキラター、そして「山男」の姿をしているシヴァ神との格闘が美しく描写されている。バーラヴィの生年は不明であるが、彼の作品にカーリダーサの影響があることから6世紀頃の人物と推定されている。

またセイロン島の王クマーラーダーサも、『ラーマーヤナ』を題材とした叙事詩の『ジャーナキーハラナ』を6世紀中頃に執筆した。この叙事詩はラーマの妻であるジャーナキ、すなわちシーターの誘拐を元に作られたものである。クマーラーダーサは文豪カーリダーサと同年代で友人でもあったと言われる。伝承によると、この詩人は古代インドに栄えたマウリヤ朝（紀元前317年頃）の王家の子孫だという。

戯曲

インドの演劇の起源は、宗教的な行動にある。特に、サンスクリット語の題材は叙事詩から取り入れられたと言われる。インド劇は「ナータカ」といわれ、ナータカの題材は戦争や恋愛であり、主人公は王、仙者、神である。ナータカには音楽、歌、舞踊の三要素が入っており、ナータカの大団円では主人公は必ず幸せに辿り着く。なお、現代のインド映画にも、この幸せな結末を迎えるという構成は継承されている。

主な戯曲家といえば、アシュヴァゴーシャから始まり、カーリダーサが先駆的劇作家として出現し、ヴィシャーカダッタやハルシャなども代表的な作者である。作品としては『マハーバーラタ』と『ラーマーヤナ』を初め、カーリダーサの多数の作品が劇に取り入

れられ、ヴィシャーカダッタの『ムドラー・ラークシャサ』も代表的な題材として使われた。

散文

古典サンスクリット文学に散文の小説が台頭して来たのは7世紀頃と推測され、アーキヤーイカーとカターの二つに分類されている。前者は「創作」と「枠物語」、後者は「実話」と「挿入物語」などが含まれる。この時代の代表作家はダンディン、バーン・バッタ、スバンドゥなどである。三人ともに活躍時期は6世紀～7世紀と推察されている。

アーキヤーイカーの一番の代表作家はダンディンであり、その代表作は『ダシャクマラチャリタ』で三編一四章から成っている。672年に執筆したダンディンの他の代表作は詩論書の『カーヴィヤーダルシャ』（詩作の鏡）である。

一方、バーン・バッタの『ハルシャチャリタ』も、アーキヤーイカー形式の代表作と言われる。『ハルシャチャリタ』はハルシャ王の生い立ちを描き、全八章から成っている。この作品には、宮廷の生活や慣習、宗教的行事、地方の自然や風物などが描写されている。バーン・バッタは627年にチャンドラピドとプンドリーク王の恋愛を元に伝奇小説の『カーダンバリー』を執筆し始めたが、完成させたのは息子のブーサン・バッタである。

説話

説話はごく古くからインド文学に存在するが、六世紀前後にグナーディヤ（年代不明）の『パンチャタントラ』が作られるに及んで目立つようになり、大いに巷間に流行した。

『パンチャタントラ』は、動物を主人公にした五編から成る物語である。原作者と年代は不明であるが、3世紀にヴィシュヌ・シャルマーによってサンスクリット語で構成されたことは確実である。五編の内容は次のようである。

一編は友人を失う話で、ライオンと雄牛を中心に書かれた。

二編は友人が出来る話で、鳩、カラス、ネズミ、カメと鹿を中心に書かれた。

三編はカラスとフクロウを主人公として、戦争と平和を中心に書かれた。

四編は得たものを失う話で、猿とワニを中心に書かれた。

五編は浅はかな行いが、ブラフマンとマングースを中心に書かれた。

それぞれの巻に多くの物語が含まれる形式を取っているのは、インド説話の特徴である。『パンチャタントラ』は翻訳されて東南アジアに広く紹介され、西方諸国にも伝播した。東西諸国の説話文学にも大きな影響を与えたといえよう。

その他の作品

古代インドの政治家、宰相、軍師であるカウティリヤ（紀元前340年～紀元前283年）とチャーナキヤ（生没年未詳）は『アルタ・シャストラ』（実理論）を4世紀頃に執筆した。15巻のこの作は当時のインド社会の法律、経済、建築、軍事、産業などについて書かれている。全作がサンスクリット語の散文で書かれており、また章の終わりは韻文で締め括られている。

その他、性愛文学の『カーマ・スートラ』も登場した。4世紀頃のヴァーツヤヤナの執筆で、男女の性愛の要訣が散文を中心に書かれている。『カーマ・スートラ』は7編から成り、内容的に64種の性愛の技芸を初め、市民の生活などを元にした性愛技巧が述べられている。このサンスクリット語の性愛文献の影響はインド社会に広まり、他の文芸作品にもしばしば影響を与え、『カーマ・スートラ』本文から引用される場合も多く見られる。

四、プラークリット語

プラークリット語は「プラークリット」すなわち「自然」を意味し、紀元前5世紀～紀元1世紀頃、古代インドに発達した言語を指す。古代では、サンスクリット語の使用はバラモン教徒に限られていたが、その後、バラモン教徒以外にもこの言語が使用されるようになっていったことからサンスクリット語に変化が起こり、プラークリット語が発生した。その結果、一般人もプラークリット語を使うようになった。

それまで一般的に宗教的な経典と文学などは格調高いサンスクリット語で書かれてきたのだが、仏教とジャイナ教は一般の言語を使用することを狙い、それらの経典や作品をプラークリット語で書き始めた。同時に、宗教的な経典文学以外にも作品が残された。説話文学の『ブリハットカター』（大叙事詩。マハーバーラタの登場するパーンダヴァ国の王族であるナルワーハヌ・ダットを描いた神話）、ジャイナ伝本などがプラークリット語の代表作として認められる。更に、サンスクリット語詩人もプラークリット語で作品を執筆するようになった。又、戯曲の言語として、それまではサンスクリット語しか使われなかったが、やがてプラークリット語も使用され、文学用語として重要な役割を持つようになった。

上記のように、プラークリット語では宗教的な経典以外に説話文学が注目される。その中でも『ブリハットカター』は代表作といえよう。

プラークリット語は日常生活で用いられる口語ではなかったが、演劇にも登場した。プラークリットは主にジャイナ教を中心した言語ともされており、サンスクリット語のような主要な作家や作品などが多く出たわけではない。それは、ジャイナ教がプラークリット語で経典の教えなどを一般人に伝えることを目的としたからである。

グナディヤによって書かれた『ブリハットカター』は、インドの西方に流行していたプラークリット語の一種、あるいはパイシャーチー語（西の方の言語）で執筆された、10万韻から成る作品である。『ブリハットカター』の成立年代は不明だが3世紀の作品だと推察されている。内容はヴァツァ国のヴウダヤナ王とヴァーサヴァダッター妃との結婚、王子の冒険物語などを述べた説話集である。

ハーラ王によって、プラークリット語の叙情詩集である『サッタサイー』が編集された。ハーラ王は1世紀～2世紀頃、南インドでハーラ・サータヴァーハナの名前で政権を

握っていた。『サッタサイー』は「七百詩集」を意味し、内容的には、自然、村落の生活、恋の喜びと悲しみなどが美しい表現で描写されている作品である。

ヴァークパティ・ラージャによって叙事詩の『ガウダヴァホ』(ガウダ王子)が8世紀に執筆された。この作品は、ガウダ王子とヤショーヴァルマン王の戦争、ガウダ王子の殺害を中心に、自然の風物や季節の描写に神話伝説を交えて執筆されている。

この時期、仏教とジャイナ教がヒンドゥー教に対する革新思想として、大きな足跡を残した。プラークリット語は上記の作品以外にも仏教が発達させた多くの優れた作品を残したが、それについては次の部で説明して行きたい。

五、パーリ語

仏教が導入されることでヒンドゥー教とサンスクリット語の影響が弱くなり、仏教の人氣が高まるにつれて、新しい言語も出てきた。仏教の経典や注釈などが書かれている言語を「パーリ語」と呼ぶ。パーリ語は文法的にサンスクリット語と良く似ており、文体はウパニシャッドの言語に類似する。

先に述べたように、マガダ国(現在のビハール州)のアショウーカ王(紀元前304年～紀元前232年)が仏教に改宗したことから仏教はインド全体に伝わり、さらに外国にも伝播した。それと同時に、仏教の経典を通してパーリ語も伝わっていった。文献を辿ってみると、パーリ語は、インド以外の国、つまりセイロン島、ビルマ、タイ、カンボジアでも使用された。パーリ語では、仏教の経典類以外に注目された作品は多くない。パーリ学者は仏教の学者であり、彼らの主な活動は仏教の教えを分かりやすく解釈することと仏教の経典を習得することにあった。その為に、仏教の主な言語として取り扱ったのがパーリ言語であったと言える。

パーリ語で書かれた仏典は仏教の教説を知るための重要な資料であるが、同時に当時の社会状態を知る上でも高価値の資料である。そして、文学的にも重要な作品を持つ。

パーリ語で書かれた『ダンマパダ』(真理の言葉)は、26章で423詩の詩集である。仏教の道徳を説く本作は、それまで仏教の学者団によって口から口へ伝えられていた詩を集録したものと思われる。この仏教の聖典といえる作品は、紀元前3世紀から1世紀に執筆されたと推定されている。

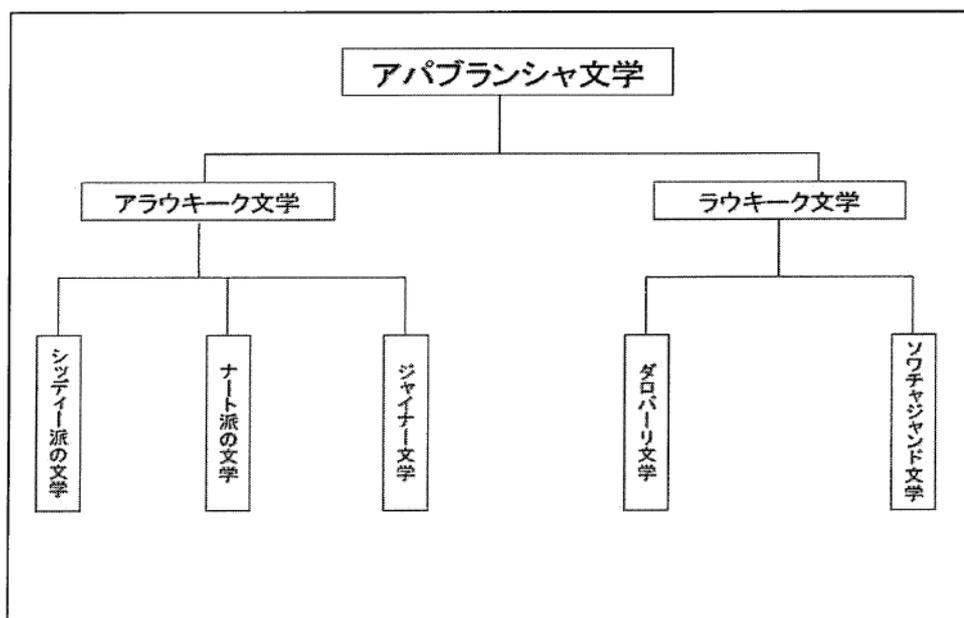
パーリ語で書かれた『ジャータカ』は、仏教経典に於ける前生の物語である。547編から成る本作は伝説、説話、教訓、機知などを元に、古代インドの社会生活、文化状況を物語っている。1世紀頃の作品だと推定される『ジャータカ』は、娯楽と同時に仏教の道徳を教えるもので、各話は現世物語と過去世物語を結び付け、散文の後に韻文の詩で締め括っている。ジャイナ教でも、この物語はジャイナ化されて『ジャイナ・ジャータカ』と言う名前で作成された。『ジャータカ』の影響はインドに留まらず、仏教と同じように海外の文学世界に大きな影響を与えた。

更に、『ミリンダパンハー』は仏教師のナーガセーナが出した回答を題材にして作られ

た作品である。すなわち紀元前2世紀頃の、西北インドのミリンダ王による仏教についての対話が散文と韻文で簡潔に述べられている。作者は不明だが、執筆者は仏教師団の中にいたと想像される。

六、アパブランシャ語

アパブランシャ語はいくつかの言語が混成して発生した言語であり、パーニニのサンスクリット語の文法によると「なまった言語」として考えられている。それ以前の知識階級の者達はサンスクリット語、プラークリット語、パーリ語を中心に使用していたが、アパブランシャ語は多数の言語、または国民の中から発生したことから、注目される作品数などはサンスクリットよりは比較的少ない。このアパブランシャ語は、最終的に現在のヒンディー語に繋がるものである。ラメシュ・チャンドラ・シャルマが執筆した『ヒンディー文学の歴史』によると、アパブランシャ語の文学は次のように分類される。



アパブランシャ語の文学は、上記の表のように、アラウキーク अलौकिक (宗教的なもの) とラウキーク लौकिक (世俗的なもの) の二つに、大きく分類される。そして、宗教的な文学は更に、「シッディー文学」、「ナート文学」、「ジャイナー文学」に三分類される。

「シッディー文学」の登場は、1世紀に仏教がヒーナ・ヤーナ (大乘仏教) とマハー・ヤーナ (小乗仏教) に区分された後のことである。シッディー派の文学はインドのビハール州にあるナーランダと、パキスタンにあるタクシラを中心に行われ、真言密教を生み出した。サルハパー、サバラパ、ナガルジャナなどが「シッディー文学」の代表作家である。

サルハパーは690年生まれで、一般市民の言葉で作品を執筆した。サルハパーはナーランダ大学に所属するサンスクリット語の学者でもあった。アパブランシャ語で書かれた『ドーハー集説教』はサルハパーの代表作である。サルハパーは、ドーハーという韻文の一種を通して、人民に仏教の説教を伝えようとした。

次に「ナート文学」であるが、これはシッディー派の密教を更に発展させてできた形式である。ナート派は密教、ヒンドゥー教、そして新しく導入されたイスラム教の影響を混在させた学派であった。ナート派の文学は後にヒンディー語の文学に繋がることもあるので、ナートの代表作者はヒンディー語が発展した時期に登場する。11世紀に生まれたゴーラクナートがそれで、彼の執筆作品は約40作あると言われる。代表作品は『サブディー』(教説歌集)である。

「ジャイナー文学」も、アパブランシャ語で書かれている。アパブランシャ語を用いた最も有名な詩人であるプシュパダントは、10世紀頃の人物で、いわゆる第二クリシュナとしても知られていた南インドのラーシュトラクータ朝のスパトング王(878年～914年)の宮廷詩人であった。プシュパダントは王の支持を受け、叙事詩の『ティサッティ・マハプルサ・グナーランカーラ』*तिसत्थी महापुरुषा गुणालंकरा*を作成した。この作品は102編から成り、63人の聖人の生涯が述べられている。この作品は近代に至って、『マハ・プラーナ』の名でも知られている。

次に『ネーミナーハチャリウ』という作品は、ジャイナ教師のネーミナータの生涯を描いた伝記物語である。ネーミナータは紀元前3世紀に生まれた王であり、結婚の際に殺された動物を見てジャイナ教に改宗し、ジャイナ教の22番目のティリタンカラ(大教師)になった人物である。この作品は1159年に書かれ、ネーミナータの苦行の生涯の中にある恋愛、戦勝、伝説的挿話などが描かれている。

以上が、アパブランシャ語で書かれた「アラウキーク(宗教的な題材)」の主立った作品である。

一方、アパブランシャ語の「ラウキーク(世俗的な題材)」文学は二つに分別され、ダロバリー文学(宮廷文学)とソワチャジャンド文学(独自文学)に分かれる。「宮廷文学」はインドの地方の王の宮廷で作成されたもので、独自文学は人民の中から出た一般人の作者の作品である。

ダナヴァーラ(10世紀頃)は、北インドの王であるバヴァサッタ(年代不明)の宮廷で、22章から成る叙事詩『バヴァサッタカハー』をアパブランシャ語で作成した。バヴァサッタ王の恋愛伝記であるこの作品には、主人公のバヴィサッタの戦闘の場面がサンスクリット語の大叙事詩から連想されている。すなわちアパブランシャ語の文学も大叙事詩『マハーバーラタ』と『ラーマーヤナ』の影響下にあることを示しているのである。

そして、アパブランシャ語で「独自文学」が登場した。イスラム教の学者であるアブラ・ラハマーンが、4世紀～5世紀頃のカーリダーサが生み出したドゥータ(使者)文学

の形式を使って、『サンデーシャ・ラーサカ』（伝言の牧歌）を執筆した。アブダラ・ラハマーンは1010年にムルターンに生まれた。32章から成る彼の叙情詩集は、女性の恋人が憧れの心と独りの寂しさを季節と共に描写している作品である。

七、ヒンディー語

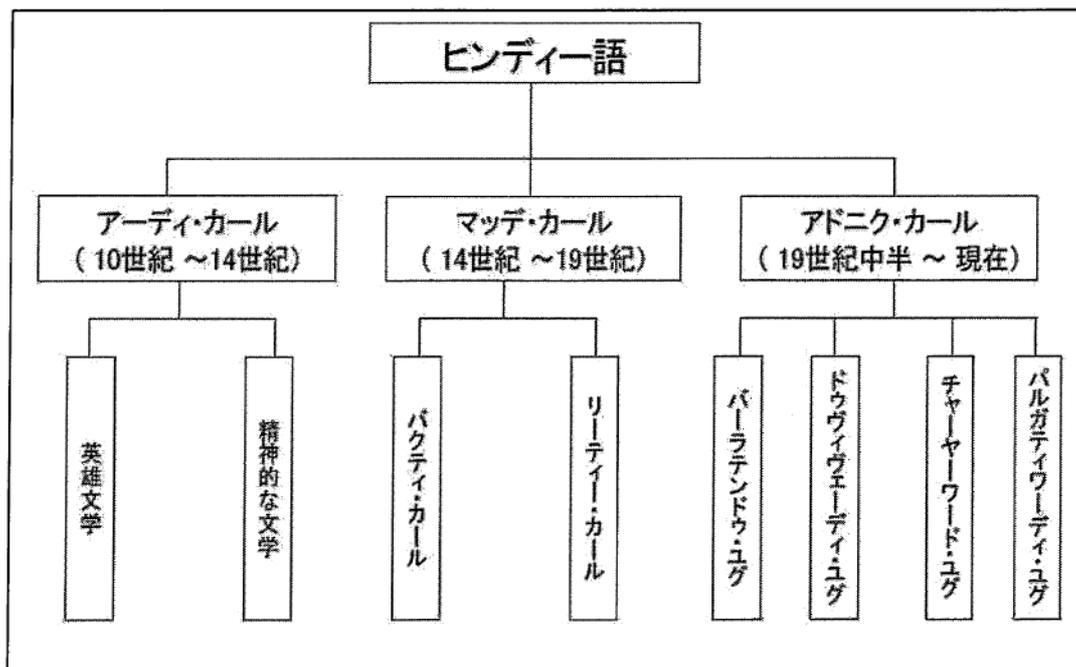
多数言語の国であるインドではヒンディー語が国語として認められているが、ヒンディー語はこれまでに述べてきた言語の歴史を通じて、現在のヒンディー語の文体に変容してきた。ヒンディー語は地方による様々な方言を持ちながら、東はヒマーラヤ山脈から西はラージャスターンのタール砂漠まで、北のカシミール州のジャムム地方からデカン高原まで、インドに於いて圧倒的な勢力を持っている。いくつかの方言もあるものの、大勢として標準ヒンディー語が文学、教育などの分野で用いられている。

更に、ヒンディー語はインド国内に限らず、フィジー、モーリシャス、ネパールなどでも多くの人に話され、合わせて、地球上で約5億人以上の話者を持つ言語である。

インドの文学は、サンスクリット語、プラークリット語、パーリ語、アパブランシャ語に引き続き、新たな作品をヒンディー語で生み出している。方言によるヒンディー語文学の作品もあったが、長い歴史の中で消えて作品は残されていない。従って本稿でヒンディー語の文学として指すのは、10世紀から現代に至るまでの標準ヒンディー語の作品である。

ヒンディー語の歴史

ヒンディー語の時代区分は何人かの学者によって語られてきた。ヒンディー語の学者のハジャーリ・プラサード・ドゥヴィヴェーディー（1907年～1979年）によると、ヒンディー語で書かれた文学の概略の歴史は、次のように分けることができる。



上記の時代区分は歴史に影響を与えた出来事や、社会的な状況が変わる年に基づいて分けている。

ヒンディー文学のアーディ・カール（古代）、マッデ・ダール（中代）とアドニク・カール（近代）の分類は、それぞれの時期に活躍した学者や詩人の名前、または流行のジャンルによって命名されている。

次にそのことについて述べて行きたい。

（一）、アーディ・カール आदिकाल（古代）

10世紀以前、インドの政治状況は、多数の王がいてそれぞれの地方に自分の国を築き、互いに戦争を起こしていた。人民は様々な問題に直面していても無視され、貧困の中で生活を営んでいた。

ヒンドゥー教と同時に、仏教とジャイナ教の影響も衰え、宗教は儀式や迷信に過ぎなくなっていった。又、各宗教は様々な派に分かれていた。イスラム教がインドに入ってきたのは、そのような時代であった。

インド社会では厳しいカースト制度があり、人民は身分的に各カーストに別れていた。一般人は政治と宗教の世界に参加できず、政治と宗教と教育などに携われるのは上級のカーストに限られていた。

インドは10世紀には政治的に大きな変動があり、ヒンドゥー教の王が次々に負け、ムスリムがデリーの王位を得た。この時代には人民は戦争の中で暮らして戦争文学が登場し、一方、戦争を嫌う学者は精神的な文学を執筆した。そして、イスラム教がインドに導入されたのでヒンディー語文学にイスラム教の思想が見られるようになり、一般人の言語となっていたヒンディー語が更に変化していった。次の二つが当時の主な文学の区分であった。それは1.「英雄文学」2.「精神的な文学」である。

1.「英雄文学」としてまず取り上げられるのはチャンド・バロダーイー（1205年～1249年）の1220年に執筆した『プリトゥヴィーラージ・ラーソー』という叙事詩である。プリトゥヴィーラージ（1165年～1192年）はデリーの最後のヒンドゥー王であった。『プリトゥヴィーラージ・ラーソー』はその彼の生涯を叙事詩で表した、著名な作品である。この作品はヒンディー語の最初の作品とも言われるが、当時のインドのチャトリア階級（日本の武士階級に相当）の社会と伝統なども描写されており、ムスリム（イスラム教徒）との戦いが英雄的に描かれている。歴史的には、この戦争でピリーティーヴィ王が敗れ、ムスリムがデリー王位を奪取した。

他の英雄叙事詩として著名なのは、9世紀初めのダルパティ・ヴィジャヤの『クマーン・ラーソー』である。この叙事詩は当時の最も古い作品で、五千韻から成っている。内容は、ラージャスターン州のクマーン王の戦場での活躍を描いている。また、北インドでよく語られる『パラマール・ラーソー』は民俗詩集で、アールハとウダールの英雄物語となっている。12世紀のこの作品は詩人ジャグニーク（年代不明）によって執筆された。さ

らに1212年にナルパティ（年代不明）が、英雄詩集の『ビスアルデワ・ラーソー』を執筆した。当時は続々と英雄文学が登場したのである。

2. 「精神的な文学」では、作者として学者が何人か登場するが、この文学を花開かせたのは、アミール・フスロー（1253年～1325年、本名はアブル・ハサーン・ヤミヌッディン・フスロー）とヴィッデヤ・パーティ（1360年～1448年）である。

アミール・フスローは、ムスリムの父とヒンドゥー教の母の間に生まれた。アミール・フスローはヒンディー語を用いた最初の詩人としても認められており、合わせて99冊の作品を執筆している。フスローの代表作は『キッサ・チャーハー・ドルヴェシュ』あるいは『四人の聖人』と『カリク・バーリ』である。『四人の聖人』はイスラム教の四人の貴族達が聖人になるきっかけを物語り、『カリク・バーリ』はヒンディー語とペルシア語の最初の辞書が詩の形で示されたものである。フスローは、詩を通してムスリムとヒンドゥーを繋ぐ橋としての役割を果たした。フスローはサンスクリット語、ヒンディー語、アラビア語、ペルシア語を習得し、謎々を詩として詠む形式が人民に親しまれ、幅広く受け入れられた。更に、フスローが詠んだ新しいジャンルの詩であるドーハーも当時の学者達によって高く評価された。

ドーハーの人気は現在に至っても残っている。ドーハーとは、四つの文章が13字—11字—13字—11字で構成される短詩型である。フスローのドーハーの例を以下に記しておく。

〈ヒンディー語〉 खुसरो दरिया प्रेम का,
उलटी वा की धार,
जो उतरा सो डूब गया,
जो डूबा सो पार

(खुसरो)

〈読み〉 フスロー・ダリヤ・プレムカ・ウルティー・ヴァキ・ダル
ジョ・ウトラ・ソ・ドーブガヤ・ジョ・ドーバ・ソ・パル

フスロー

〈訳〉 フスロー、愛の川には、逆流がある。
上に浮く者は溺れるし、溺れる者は渡る。

ヴィッデヤ・パーティは現在のビハール州にあるミティラーの王キリーティー・シングの有名な宮廷詩人であった。彼はサンスクリット語とヒンディー語を習得しており、代表作は『パダーワーリ』、『シャヴェ・サルヴェ・サヴァーサール』である。ヴィッデヤ・パーティは14世紀に執筆した『パダーワーリ』で、ヒンドゥー教の神であるクリシュナと女神であるラーダの恋愛を独特な美しさで描写している。この作品は熱烈な信仰心と神への美辞麗句を連ねた文辞を合流する美しい叙事詩である。そして、『シャヴェ・サルヴェ・サヴァーサール』は、神への献身を述べた詩の作品である。

(二)、マッデ・カール मध्यकाल (中代)

ヒンディー文学のマッデ・カール (中代) はさらに二つに分かれる。一つは1. 「バクティ・カール (献身時代)」、もう一つは2. 「リーティ・カール (作詩法文学時代)」である。

当時の政治状況を見ると、1320年にインドでトゥグラク朝 (1320年～1414年) が政権を握った。ムスリム王であるギヤースッディーン・トゥグルク (在位 1320年～1325年) が新王朝を建てたものの早期に死亡し、息子のムハンマド・ビン・トゥグルクが跡を継いだ。彼はインド全域を支配し、ダウラターバード (現在のマハーラーシュトラ州) に首都を移したが、内部反乱のせいで2年後デリーに首都を戻した。けれども、これによってデリーから南インドまでの道路などが整備され、北インドと南インドの文化的、経済的交流が促進された。

次に、ロディー朝 (1451年～1526年) がデリーの王位となった。その後、シェール・シャー・スーリーによって、スーリー朝 (1539年～1555年) が建てられた。これはパーターン帝国とも言われる。この時代に、インド大陸は最高の経済発展と行政改革を体験した。王と人民の関係は調整されて国民への弾圧がなくなり、文化的に大きく発達した。インドの貨幣の単位であるルピーもまた、この時代に作られた言葉である。

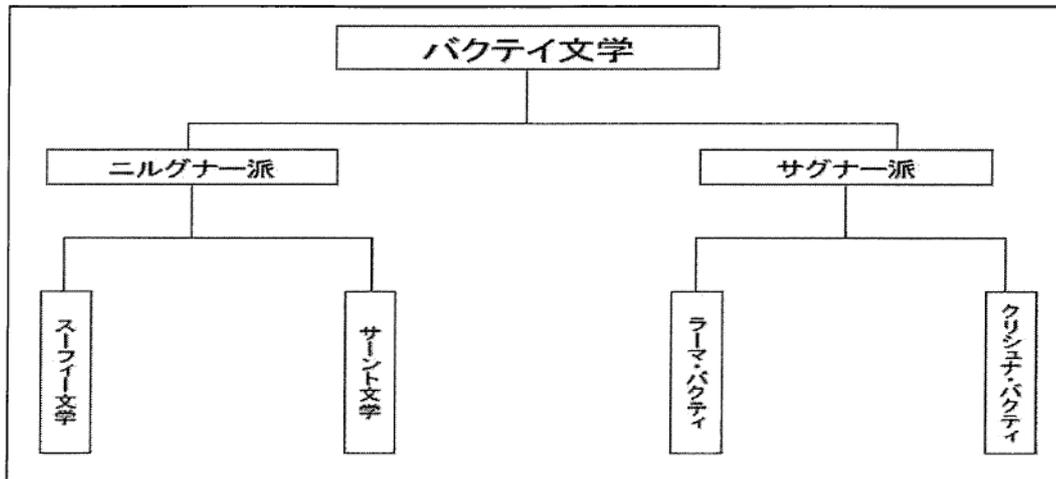
社会的な状況に目を遣ると、戦争時代と比べて社会が安定して平和が確立された。王と人民の関係が良くなったことから、人民が困難にある時は王が救民の政策を執るようになり、その結果としてムスリムとヒンドゥーの友好関係が樹立され、両者がお互いの差別なく各分野での交流を始めた。これ以前ならばほとんど考えられないような、ムスリム王とヒンドゥー貴族の間の結婚も良く見られるようになった。カースト制度によって身分的に分けられていたヒンドゥー教徒は、イスラム教にカーストがないことに魅力を感じ、多くの人々がイスラム教に改宗した。この交流の影響は、言語、文化、文芸、絵画、建築などに幅広く見られたのである。

1. バクティ・カール भक्तिकाल (献身時代)

当時の政治、宗教、社会からの影響を受けて、バクティ・カールの文学 (献身文学) が生み出された。

バクティ・カール (献身時代の文学) は、主に二つに分けることが出来る。それはニグナー派とサグナー派であり、前者はスーフィー文学とサーント文学に分類され、後者はラ

ーマ信仰とクリシュナ信仰に区分されている。当時の文学区分を図で示すと次のようである。



バクティ文学はニルグナー派とサグナー派に区分される。ニルグナー派は、形の無い神、あるいは偶像崇拝をせず、神を絵と像で示さない派のことである。この考えはイスラム教が導入された後にインドに幅広く流行し、ヒンドゥー教の哲学学校であるアドヴァータ学校や非物質的な神のことを教えるドヴェータ学校が作られた。この道徳を説くニルグナー派は、更にスーフィー文学とサーント文学に分類される。

ニルグナー派のスーフィー文学とサーント文学に見られる主張の特徴を示す。

- ・形の無い神を礼拝
- ・多神教（擬人化）に反対、または一元論的教義を持つ
- ・世界は無常である
- ・世俗のことに対抗する
- ・カースト制度に反対
- ・神秘的な発現
- ・恋愛要素に優位性を認める
- ・自然の描写
- ・詩と新ジャンルの韻の作成

スーフィー文学はヒンドゥーの間で親しまれている民話を題材にし、スーフィーの思想を一般に伝えるために、豊かな想像力を駆使して物語化されたものである。スーフィー文学の最初の作家として認められているのは14世紀のムッラー・ダウド（年代不明）で、

1370年頃に『チャンダーヤン』を執筆した。主人公のローリックと女主人公のチャンダーの恋愛物語である『チャンダーヤン』の特徴は、12ヶ月の歌にある。女主人公のチャンダーが恋人のローリックに対して各月を題材にして歌を作り、それが人民の大好評を得た作品である。

もう一人の代表作家であるマリック・モハンマド・ジェヤシ（1492年～1542年）は、合わせて24作品を執筆しているが、代表作として認められているのは叙事詩『パドマヴァート』である。1540年に完成された『パドマヴァート』は、ラタヌ・セン王とパドマヴァティー皇女の恋愛物語である。この作品は、歴史性と精神性、想像力を併せ持ち、インド文化を代表すると共にスーフィー文学の最高作品である。他にスーフィー作家としてはババ・ファリド（1175年～1265年）とスールダス（1479年～1586年）などの名があげられる。

15世紀に入ると、ヒンディー文学界がバクティ運動の高まりを反映し、先駆者となるカビール（1440年～1518年）の登場によってバクティ文学のサーント文学が生み出された。サーント文学の思想とは、イスラムのスーフィー神秘思想、ヴェーダーンタの不二一元論、ナートの思想などが入り混じった思想のことである。サーント文学の代表作家と言えば、先に述べたカビール（1440年～1518年）である。カビールはバナーラスでヒンドゥー教のパラモン之家に生まれ、世間体をはばかりる母に幼い頃に捨てられたが、ムスリムの織工に拾われて育った。ムスリムの文化で育ったカビールが師事したのは、15世紀の著名なヒンドゥー教の師ラーマナーダだった。ムスリムの家に育ちヒンドゥー教の師ラーマナーダの教えを受け取ったことは、カビールの人格、思想の形式に大きな影響を与えており、彼の作品にも当時の混沌とした社会が如実に写されている。

カビールは万以上の詩を詠み、多作の詩人とされているが、彼の代表作は『ビージャク』である。カビールは自らの思想、教義を広めることを優先し、心に浮かんだことを即興的に詠んで行った。『ビージャク』には三部、すなわち「サーキー」、「サバド」、「ラマアエニ」が収められている。カビールは人民の詩人であり、一般人の言語で様々な状況に当てはまる自らの確固とした思想を口述したので、彼の知識に溢れる言葉や詩の一種であるドーハーは、当時から現在に至るまで、人々によって口から口へと伝えられて来た。カビールのドーハーの一つの例を挙げておく。

〈ヒンディー語〉 पोथी पढ़ पढ़ जग मुआ पंडित भया न कोय

ढाई आखर प्रेम का पढ़े सो पंडित होय (कबीर)

〈読み〉 ボティー・パド・パド・ジャグ・ムーア・パンディト・バヤ・ナ・コイ

ダーイ・アカール・プレームカ・パレー・ソー・パンディト・ホーエ

(カビール)

〈訳〉 一生を費やして経典を読み続けたとしても、誰も賢明にならない

愛の言葉を理解した者だけが賢明になるのだ。

イスラムの影響とカビールの思想に共鳴して、グル・ナーナク（1469年～1539年）によって16世紀初期にヒンドゥー教の改革派であるスィック教が、パンジャーブ地方に登場した。そのスィック教の聖典である『グル・グラント・サーヒブ』にも、カビールの詩は多数収められている。

他のサーント文学者としては、ダードゥー・ダヤール（1544年～1603年）がいる。彼もカビールの思想の系列に属しており、ダードゥー・パントという新たな派を立てた。ダードゥー・ダヤールの詩はカースト制度に反対し、イスラムとヒンドゥーの友好のために琴線に触れるような詩を詠んだ。彼の弟子は何人かいたが、良く知られているのはスندگانダース（1596年～1689年）である。彼はサンスクリット語の学者として知られており、詩作の複雑な技法に通暁していた。

サグナー派は形ある神や像を崇拝する思想を指し、この派の文学はサグナー派文学と言われる。サグナー派は、ラーマ信仰とクリシュナ信仰に分類され、ラーマを信仰する文学はラーマ信仰文学、クリシュナを信仰する文学はクリシュナ信仰文学と言われる。

ラーマ・バクティ（ラーマ信仰）文学とは、熱烈なラーマ信仰を世に伝えた作品を指す。ラーマ信仰文学の代表作家はゴースワミー・トウルスィーダース（1532年～1623年）で、著者作品は12冊から成る。1547年に彼が執筆した『ラーマ・チャリット・マーナス』は代表作であり、ヒンドゥー教では聖書と同じように尊重され、この時代の『ラーマーヤナ』とも呼ばれている。『ラーマ・チャリット・マーナス』は七部から成り、四行から成る一種の詩であるチャウパイとドーハーの詩を合わせた叙事詩である。

1579年に執筆されたこの作品は、サンスクリット語で書かれた『ラーマーヤナ』の展開を踏襲しつつも当時の言語で表現しており、英雄でありながら世俗の人として描かれたラーマと他の登場人物を神格化させた功績がある。古代の『ラーマーヤナ』はサンスクリッ

ト語で書かれていることから、享受者はバラモンに限定されていたが、『ラーマ・チャリット・マーナス』は当時の言語で書かれていたため一般人にも受け入れられた。そして、登場人物の理想的に美化された行為は、ムスリム側からの文化的な影響や価値体系が対立していたこの時代に、バラモンの秩序を回復した。

この一作は人々の生活にとって道標となり、民衆はことあるごとに『ラーマ・チャリット・マーナス』を引用し、取るべき態度を決定した。

ラーマ信仰文学の他の突出した作品は、ケーシャブダース（1555年～1617年）の『ラーマ・チャンドリカー』である。17世紀初期に執筆された七編から成るこの韻文物語もラーマ信仰を主題としているが、焦点は詩作の技法に置かれている。その他、アグララダース（1575年～没年不明）と彼の弟子であるナーバーダース（1600年～没年不明）が1585年に著した『パクト・マール』は、韻文で書かれた当時の詩人達の列伝である。

もう一方のクリシュナ信仰文学は、バクティ・カール文学の末期に発達した。サグナー派のラーマ信仰文学が民衆に大きく受け入れられたので、バラモンの思想をより根強くするために、今度はサンスクリット語の叙事詩である『マハーバーラタ』と他の作品に登場するクリシュナを選択し、彼の生涯を題材に、優れた詩集を作成したのである。クリシュナはヒンドゥー教の神であるヴィシュヌの化身クリシュナであると主張し、純粋な心でクリシュナを慕えば、誰でも至福の境に至ると、美しい詩によって一般人に伝えようとしたのである。

クリシュナ・バクティ（クリシュナ信仰）文学派を始めたのはヴァッラバ（1479年～1531年）で、当初はサンスクリット語で著作したが、その弟子達はクリシュナが育ったといわれる地方のヒンディー語の方言であるブラジュ・バーシャーを利用して詩作をした。この一門からは優れた弟子であるスールダース（1478年～1580年）が登場し、クリシュナ信仰文学の代表作者として文学界に多大な貢献をした。12章からなる『スール・サーガル』（海のメロディー）は、古典サンスクリット語の作品を参照して編まれた、スールダースの代表詩集である。

更に、当時はクリシュナ信仰を持つ女性も登場した。ラージャスターンの女王であるミーラー・パーイー（1498年～1547年）は、他国の王に嫁いだが夫が若くして逝去したので俗世から心が離れ、その頃、世に広まっていたクリシュナ信仰を始めた。その後、クリシュナを自らの夫に見立てて愛を示す賛歌を歌った。ミーラーは四つの作品を執筆したと

言われるが、代表的な作品は賛歌集の『パダーヴァリ』である。この作品はラージャスターニー語で書かれ、現在伝えられている伝本はいくつかの方言で書かれている。

クリシュナ信仰文学に於ける他の作家は、ラスカーン（1548年～1628年）と16世紀中期に活躍したヒト・ハリヴァンシュである。ヒト・ハリヴァンシュはクリシュナの愛人であるラーダーを信仰した。

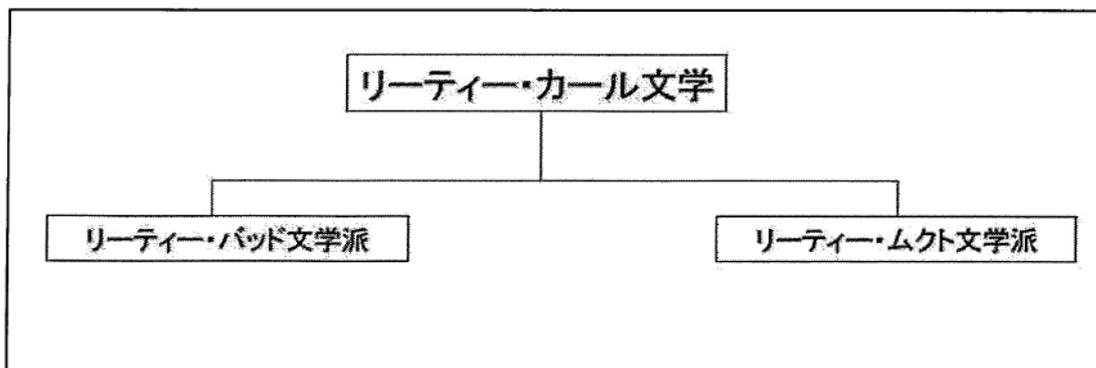
2. リーティー・カール रीतीकाल (作詩法文学時代)

リーティー・カールと呼ばれるヒンディー文学中期の歴史的、政治的、社会的状況を、まず述べておく。16世紀から19世紀に掛けて、インドにムガル朝の統治が確立され、ヒンドゥー諸王が力を失っていった。17世紀は歴史上「黄金期」と呼ばれ、インドは経済的に安定し繁栄した時代となった。ムガル帝国第5代皇帝のシャー・ジャハーン（1592年～1666年）は亡くなった愛姫ムムターズ・マハルの墓廟として大理石のタージ・マハルを建設したが、これはイスラム文化の代表的建築となった。

17世紀にはインドの経済、文化、建築などは世界中の注目を集めていたが、18世紀のムガル帝国第6代皇帝のアウラングゼーブ（1618年～1707年）の没後、ムガル帝国内部では退廃的な雰囲気支配的となっていった。1600年にイギリスによって設立された東インド貿易会社は、インドに深く根を下ろし、インドを支配下に置こうとしていた。

この時期の社会的状況を見ると、ムスリムはヒンドゥー文化を受け入れ、またヒンドゥーはムスリムを社会的に容認したので、文化・文学が大きく栄えた。詩人たちは皇帝や貴族の庇護下であり、文芸は王や貴族にとって、知的な喜びを得るために生活に必須のものとなっていた。結果として、イスラム文化は皇帝文化として一般の人々の間にも浸透し、社会に広範な影響を与えた。この文化的に豊かな社会生活の影響は、この時期に作成された作品にも現れている。

リーティーカールの文学は以下のように大きく二つに分けられる。



リーティー・バッド（様式に従う）文学は、バクティ時代の詩より享受者のレベルが低下し、俗語などもヒンディー語の韻文に詠み込まれ、エロティックな要素がヒンディー語文学の主流となっていた。しかし詩の理論は、このリーティー・カール（作詩法文学時代）に最大の成長を見せた。そして詩の重要なテーマとして恋愛が、言葉には俗語が入り込んできた。例えば、クリシュナを信仰する詩は、この時代が来ると、クリシュナ神の周りに仕える女性達の生活と恋愛を中心に詩が詠まれるようになった。すなわち「ラーサー（神の性的なこと）」、「アランカーラ（神の装飾的な概観）」などを大きく取り上げられて詩が書かれたのである。

リーティー・バッド文学派の代表作家はビハーリーラール（1595年～1663年）である。詩人であるビハーリーラールはインド中部の都市であるグワーリヤルに生まれ、ムガル帝国に服従したジャイプルの王ジャイ・シングの宮廷詩人として活躍した。彼が執筆した『サタサイ』は七百句の恋愛詩集で、ラーダーとクリシュナの恋愛を官能的に美しく表現したものである。

他に17世紀のマティ・ラームが著名である。代表作は1695年頃に執筆した『ラスラージ』（恋愛詩集）と1720年に執筆した『ラリットララーム』（宮廷で行われた恋愛詩集）で、共に美しい言葉で綴られた詩集である。

更に、1609年にリーティー・カールに生まれたチンターマニ・トゥリパーティー始め、彼の三人の兄弟は皆、詩人として名を知られている。チンターマニは五作品を執筆したが、1650年に執筆した『カヴィクル・カルプタル』（恋愛詩集）と1700年前後に執筆した『カーヴィヤ・ヴィヴェーク』（詩の知識）が代表作とされ、詩学として流行した。

一方、リーティー・ムクト（様式を自由に）文学は、ラーサー（神の性的なこと）やアランカーラ（神の装飾的な概観）ではなく、スーフイー（イスラム神秘主義者）や宮廷生活、男女の恋愛、祭りなどを主題に取り上げた文学である。

このジャンルの代表的な文学者は1747年に生まれたボーダ（本名はブッディ・セーン）である。1830年から1860年に活動した彼の代表作は『ヴィラハ・ヴァリシュ』、『イシュク・ナーマ』である。後者は直訳すると「恋愛物語」となり、恋愛に於ける女性の心理を述べた詩集で、当時、大きな評判を集めた。そして、『ヴィラハ・ヴァリシュ』は主人公の詩人の、宮廷の踊り子のスパーンとの出会いと別れを題材にした作品である。

他の代表作家としては、ガナナンドが挙げられる。ガナナンド（1689年～1739年）は北インドに生まれ、ムハンマド・シャー（1702年～1748年）の宮廷詩人であった。20作近くの作品を執筆しているが、代表作は、『スジャヌ・ヒット』と『プレム・サロワル』（恋愛の池）とされる。『スジャヌ・ヒット』はムハンマド・シャー王の宮廷の踊り子シュジャーンを題材にしており、ガナナンドは彼女と恋に落ちたとされている。

デヴァ・ダット（1730年～1824年）は、72作の叙事詩を執筆している。かれの代表作

としては『バーワー・ヴィーラーサ』、『ブレーム・チャンドリカ』が知られている。又、彼はドーハーとサヴァイヤ（短い賛美歌）でも高い評価を得ている。

他に、ダリヤ・サハブ（1664年～1780年）、ジャグジワーン・ダース（1670年～1761年）の名も忘れがたい。

なお、古代からこの時代までの文学は韻文中心であり、散文が使われるのはわずかな注釈や伝記などに限られる。そしてこの時代に至っても、いまだ韻文が文学的に高い価値を持っていたのである。

(三)、 アドニク・カール आधुनिक काल (近代、現代)

アドニク・カール（近代・現代）のインドでは、政治的に非常に大きな変動があった。イスラム教の王が次々にイギリス軍との戦いに敗北し、インドの政権は東インド貿易会社に掌握された。1857年、東インド貿易会社の方針を批判し、インドの軍人達が最初の独立運動を起こした。彼等は勝利してデリーまで進軍したが、最終的にイスラム王であるバハードゥル・シャー2世（1775年～1862年）が敗北し、この独立運動は頓挫した。この混乱の結果、インドの政権は東インド貿易会社を介さず、直接イギリスの女王に支配されることとなった。20世紀初頭、インド全体に独立運動が徐々に激しくなり、1947年、ついにインドは独立を果たした。

このアドニク・カールの時代、インドの社会的状況は、歴史上で一番混乱したものとなった。イギリスの植民地時代に、インドが社会的、経済的、文化的に蒙った被害は筆舌に尽くしがたいほどに悲惨なものであった。イギリス人が広大なインドを支配するために取った戦略は、インド人にとって激しい苦難の記憶となっている。ムスリム王とヒンドゥー王は宗教的に争い、人民の間にも宗教的な差別が起こったことは、インド社会に最大の影響を与えた。更に、インドの土地をムスリムとヒンドゥーの統計人口によって分割するという戦略により、イギリス人はインドの国土全体を入手した。イギリスの、インドから原料を持ち帰り、そこで出来た製品を今度はインド市場で売り出すという方策によって、経済的に安定していたインドの国内産業は壊滅することとなった。更に、イギリスの工場のためにインドの農地から生産物を奪取されたことから、1876年から1905年に掛けて、インド史上でも稀な大飢饉が起こった。1876年～1878年に600万～1000万人、1899年～1900年に200万～1000万人もの人々が飢えで死んだ。1919年、ジャリヤーンワラー・バーグ事件と呼ばれるインド人のデモに対しては、イギリスからの弾圧によって3000名以上の死傷者が出た。

現代のヒンディー語文学者であるラーメッシュ・チャンド・シャルマ博士が執筆した『ヒンディー文学の歴史』では、「社会・分化的な逆境」という段落(227p)に次のように述べられている。

1. バーラテンドゥ・ユグभारतेन्दु-युग (バーラテンドゥ時代)

19世紀半ばから文学のリーティエー・カール（作詩法文学時代）が終わり、新しい時代が始まったが、その最初の時期を、代表作者であるバーラテンドゥ・ハリシュチャンドラの名前を取って「バーラテンドゥ時代」と言う。バーラテンドゥ・ハリシュチャンドラ（1846年～1884年）はバナーラスに生まれ、サンスクリット語からウルドゥー語までを習得していた。彼は15歳から作品を執筆し、ヒンディー語の方言のカリー・ポーリーを用いて韻文と散文双方で多面的な文学活動を行い、近代文学の父とも呼ばれた。

バーラテンドゥ・カールの韻文は、愛国心、社会的な問題、献身、ユーモアなどが主要なテーマとなっており、散文では、伝記、宗教、政治、文芸などが題材とされた。前の時代の伝統に従ってクリシュナ賛歌を執筆すると同時に、熱烈な愛国精神や国民の深刻な事態を描写する歌を詠み、散文でも小説、戯曲、随筆を残した。更に、初めての試みである会話歌舞の劇を、風刺的かつ豪華に作り上げた。

バーラテンドゥ・ハリシュチャンドラの韻文文学での代表作は、1871年に執筆した『ブレーム・マリカ』（恋愛の皇女）、散文文学の代表作は1881年に執筆した『アンデーリ・ナグーリ』（現代の政治を非難する作品）とされているが、これはこの年の社会問題を題材にした創作劇である。そして、バーラテンドゥによって、古代のサンスクリット語で書かれた政治劇『ムドラーラクシャサ』が当時のヒンディー語に翻訳されたことも、人々の注目を集めた。

バーラテンドゥ時代の他の代表的な作家としてはラーラー・シュリーニワース・ダース（1851年～1887年）が挙げられる。ラーラーが執筆した『パリークシャー・グル』（1882年）は、ヒンディー語の文学界で最初の小説である。この小説のプロットは、若者に伝統を守りながら近代社会に生きる方法を示すものである。他に『サンヨーギターの結婚式』も名高い。その他、学者としてパールクリシュナ・パット（1844年～1914年）の名前も挙げられる。

2. ドゥヴィヴェーディ・ユグद्विवेदी-युग (ドゥヴィヴェーディ時代)

ドゥヴィヴェーディ時代も、この時期に活躍した学者名に因んで名付けられた。マハーヴェーイル・プラサード・ドゥヴィヴェーディー（1864年～1938年）は、北インドのラーエ・バレーリという良く知られた町に生まれた。彼はサンスクリット語から英語まで幅広く勉強し、インド鉄道に入社したが、仕事が肌に合わず、文学界に飛び込んだ。

ドゥヴィヴェーディは大量の書物の翻訳を行った。イギリス人が導入した英文書物は、文学を初め法律、経済、科学書までが翻訳されたのである。当時のインドでは英語が近代の知識の源としてその修得に大きな努力が払われたが、この努力の中心にドゥヴィヴェーディ

がいた。

彼の代表作は1903年に執筆した『カヴェヤ・マンジュサー』（当時に流行っていた迷信を非難する詩集）である。他に、1909年に執筆した『カヴィタ・カラープ』（女性の美を詠う作品）、なども知られている。政府によって推進されていた英語と宮廷言語であるウルドゥー語において既に活発的な動きがあるにも関わらず、ドゥヴィヴェーディは詩作、評論、翻訳などにも幅広く活躍した。しかしながら、この前の時代のバーラテンドゥより文学的な価値は劣るとされている。

他の作家としては、マイティリーシャラン・グプタ（1886年～1946年）が著名である。彼はドゥヴィヴェーディから影響を受けた詩人であった。1909年に出版された『ラング・メ・バング』（森の中で鳥たちが王を選考する内容の作品）が彼の最初の作品であるが、代表作は1912年に執筆した『バーラット・バールティー』（インドの歴史を栄光時代を中心に執筆した作品）で、インドの過去の栄光と当時の惨状を対比した連続詩である。この作品は人民の声を促し、独立運動にも重要な役割を果たした。

他には、ジャガンナート・ダース（1866年～1932年）の名も挙げられよう。

3. チャーヤーワード・ユグछायावाद-युग（陰影時代）

チャーヤーワード時代（陰影主義の文学）という命名は、当時のインド国民の心理状況を表している。まず、イギリスによるインド支配に於ける数々の暴政行為、そしてもうひとつ、第一次大戦の影響がインドに与えた苦しみである。第一次大戦では、イギリス軍の兵士として数多くのインド軍人が徴兵され、イギリス政府のために戦った。しかし、1919年のジャリヤーンワラー・バグ事件では、そうした兵士を率いたイギリス軍によるデモの鎮圧のために弾丸が尽きるまでの銃撃戦が発生し、数限りない死傷者が出た。このような状況が、インド人そしてヒンディー文学に根深い影響を与えたのである。一方、戦争で勝利を収めた英国こそ真の近代性に溢れた国であると考えた学者団体が、イギリス詩人のワースワース、シェリー、キーツなどをヒンディー文学に導入した。そして、当時のヒンディー文学に英国の文化的、文学的な影響を与えた。

チャーヤーワード時代の学者は人間性や愛国心、神秘性や浪漫性に基づいた作品の中で、自らの不満、疑問や批判を表出した。更に、インドの独立に向けての民族運動が高まり、美しい表現で綴った陰影的な作品が多く作られた。これは詩に限らず、随筆、評論、短編小説、長編小説、戯曲の文体にまで及んだ。

そして1913年、インドのベンガル語の詩人であるラビンドラナート・タゴール（1861年～1941年）が、アジアで初めて、ノーベル文学賞を受賞した。タゴールはベンガル州のカルカッタという町に生まれ、幼い頃から詩作をした。インド国歌とバングラデシュ国歌を詩

作したタゴールは数多くの詩と物語を執筆したが、その中でも特に注目を得た作品が『ギタ
ンジャリ』であり、同作でノーベル文学賞も受賞した。日本の作家・詩人たち、特に思想家
である岡倉天心（1863年～1913年）、野口米次郎（1875年～1947年）と親交を結んだ。し
かしながら、ヒンディー語ではなくベンガル語の詩人であるので、本稿では詳述しない。

チャーヤワードの代表作家として、ニラーラー（1897年～1961年）、プレーム・チャン
ド（1880年～1936年）、スミトラナンダン・パンド（1900年～1977年）、ジャエシヤンカ
ル・プラサード（1890年～1938年）、女流のマハーデーヴィー・ヴァルマー（1907年～1987
年）、の名前が挙げられる。

インドの独立運動を呼びかける力強い詩を残したニラーラーの本名はスールヤカーン
ト・トゥリパーティーで、ベンガル州のミディナ・プールに生まれた。彼は詩集、小説、翻
訳集など幅広く活躍したが、代表作として挙げられるのは1922年に執筆した『アナーミカ
ー』（社会の様々な問題を題材にした詩集）と1936年に執筆した『ギーティカー』（新しい
韻律や歌詞が収集されている作品）である。

スミトラナンダン・パンドはチャーヤワード文学の柱と言われ、浪漫的、神秘的な叙
述で自然を記述する詩を美しく表現した。彼の代表詩集としては1928年に執筆した『パッ
ラヴ』（自然観を描写する詩集）と1932年に執筆した『グンジャン』（自然美から人間美ま
でを題材にした詩集）が挙げられるが、両作は自然の美と人間の思想の美を調和させた作品
である。

その他、著名な詩人マーカン・ラール・チャトルヴェディ（1889年～1968年）は、美し
いインドを歌って『ヒーム・タランギニ』という代表作を執筆した。当時は、独立運動が激
しくなり、ガンディーがインド国民会議派の議長に就任していた。ガンディーの教えである
非暴力・不服従というスローガンは民衆の注目を集め、今度はガンディーの教えや人物像な
どが詩の題材となり、作られた詩はインド人にとって独立運動の原動力となった。その例と
してマーカン・ラール・チャトルヴェディがガンディーを称えて詠んだ詩を紹介したい。

〈ヒンディー語〉 विश्व चक्कर खाता है और सूर्य करने जाता विश्राम,
मचाता भावों का भू-कम्प, उठाता बाँहें, करता काम
(माखनलाल चतुर्वेदी)

〈読み〉 ヴィスヴ・チャツカル・カータ・ヘ
アウル・スルヤ・カルネ・ジャタ・ヴィシユラム
マチャータ・バーヴォ・カ・ブカンブ
ウタータ・バーヘ・カルター・カーム
(マーカン・ラール・チャトルヴェディ)

〈訳〉 全世界が疲れ、太陽も隠れる
つねに努力し、鼓舞し続けよう

この時代には韻文に限らず散文も幅広く発達し、何人かの作家が登場した。その中でプレーム・チャンドの名前がまず挙げられる。バナーラスの農村に生まれたプレーム・チャンドは、ヒンディー語とウルドゥー語を代表する文学者で、散文作品を通して民族意識を一気に花開かせた。当時まで流行していた理想主義的な作品に対して、彼の執筆した小説や物語、戯曲は写実主義的であり、社会への深い関心を示していた。

プレーム・チャンドは最初にウルドゥー語の「ナワーブ・ラーイ」という筆名で執筆していたが、1907年に短編集の『ソーゼ・ヴァタン』（故郷の苦悩）が扇動的であるとしてイギリス国王によって発禁とされ、逮捕されることとなった。以後、彼はプレーム・チャンドと筆名を改め、社会悪を批判した『セーワー・サダヌ』（1918年）、独立運動で先頭に立っていたマハトマ・ガンディー（1869年～1948年）を題材にした『カラム・プーミ』（行動の広場、1923年）を執筆した。また農民の悲惨な生活を描いた小説『ゴードーン』（1936年）を執筆し、インド大陸の「小説の皇帝」とも言われた。

当時の詩の最高峰と言われた詩人モハンマド・イクバル（1877年～1938年）も登場した。彼は従来が恋愛を詠む形式であった叙情詩を用いて政治や社会の問題を取り上げ、叙情詩に新しい方向性を持たせた。ドイツ、英国を留学したイクバルは詩人、哲学者、政治家として知られていた。イクバルは1915年に『アスラーレ・フディー』（個人性と社会性を哲学的に語る詩集）、1924年に『バング・ダラー』（愛国心を題材にした作品）などの代表詩作を執筆し、これらの作品はイギリス政府によるナイト勲章授与のきっかけとなった。1905年にイクバルが詠んだ「タラーナ・イエ・ヒンド」（インド人の歌）が当時の独立運動の歌になり、現在に至ってもインドで評判が高い。

イクバルはムスリムのためにインドとは別の独立国家を創ることを提案し、この提案はパキスタンという国家に結実した。

4. パルガティワーディ・ユグप्रगतिवाद-युग (進歩主義時代)

「進歩主義文学」という命名は、その傾向から付けられている。この時代の文学の主な特徴は次のようである。

- 一、資本主義と対立
- 二、革命の感覚
- 三、ムスリムとヒンドゥーの友好関係
- 四、女性に対しての現実的なアプローチ

進歩主義の文学の旗は陰影文学の代表作家である詩人スミトラ・ナンダン・パンドとニラーラーも掲げていた。

前代の陰影時代の学者であったスミトラ・ナンダン・パンドは進歩主義時代になるとカール・マルクス（1818年～1883年）とフリードリヒ・エンゲルス（1820年～1895年）の思

想から影響を受け、『ルパーブ』という雑誌を出版した。陰影時代の作者ニラーラーもこの時期には周囲の影響を受けて進歩主義文学に力を注いだ。1941年に執筆した『ククルムッタ』（当時の社会問題を風刺と喜劇で現す詩集）という作品はニラーラーの進歩主義文学の代表作である。

この時代の代表作家としては、ナガルジューナ（1910年～1998年）、ディンカール（1908年～1974年）、ヤシュパール（1903年～1976年）アッギューエ（1911年～1987年）の名前が挙げられる。

ナガルジューナはビーハル州のダロバーンガと言う町に生まれ、サンスクリット語からヒンディー語まで勉強し、「ヤトリ」（旅人）という詩号で詩を書き始めた。彼の詩は深刻な社会問題や政治的な混乱を題材とし、豊かな感受性を活かした詩を発表した。代表作としては1969年に執筆したインド人の思想を描写する詩集『マントラ・カヴィータ』がある。

ヤシュパールは小説作家で、パンジャブ州に生まれ、母が教鞭を取っていた学校で勉強を始めた。子供時代の苦しい生活は彼を共産主義思想に接近させ、その作品にも強い影響が見られる。1943年に執筆した小説『デース・ドロヒ』（売国奴）は共産主義者の動きを描いた代表作品である。様々な社会的な問題を扱った作品から、小説界でヤシュパールはプレーム・チャンドの次に位置する人物とまで言われた。1958年に当時の社会的、政治的、文化的な問題を題材として書かれた小説『虚偽の真実』は彼のもう一つの代表作である。

アッギューエはヒンディー語の詩人、小説家、評論家として知られている。本名はサッチダーナンド・ヒーラーナンド・ヴァーツヤーヤン（1911年～1987年）で、ウッタル・プラデーシュ州の有名な町クシーナガルに生まれた。学生時代インドの独立運動に参加して逮捕され、獄中で詩や小説を綴った。三部から成る長編小説『シェーカル・エク・ジヴァニ』（シェーカル、一つの伝記）では、独立に伴う混乱に巻き込まれた庶民の姿を生き活きと描いている。この作品は1941年に出版された。

アッギューエが書いた詩集は25作以上あり、『アリオ・カルナー・パラバメ』（1959年）と『キティネ・ナオメ・キテネ・バール』（1967年）が代表作として知られている。小説、物語、戯曲、日記、評論の執筆と並行して、1953年にインド東北部の旅を綴った『アレー・ヤヤワル・ラヘーガ・ヤード』（この遊牧民、記憶に残るだろう）と1960年のヨーロッパ旅行を記した『エク・ブンド・サフサ・ウチリ』（急に飛んだ一滴）という二つの紀行文を著している。

アッギューエは1957年には日本も訪れ、日本社会を観察し様々な体験をした。アッギューエは日本の美しい自然を歩き、日本古来の詩が持つ情緒深い意味に感動した。特に、世界最短の詩である5-7-5の音節を組み合わせた「俳句」は彼に大きな影響を与え、帰国後に

アッゲエエは芭蕉と蕪村の俳句をヒンディー語に訳し、詩集として出版している。

植民地時代を経て、独立したインド社会は自由の文学を培っていった。一方、イギリス時代に公用語は英語であったことから、現代では英語の文学や詩などがヒンディーの文学や詩に影響を与え続けている。

最後に

インドの文学の歴史も他の国と同じように韻文から始まり、近代になると、散文が韻文を越えて、文学界で高く位置づけられた。特にバーラテンドゥ時代の戯作家であるバーラテンドゥや陰影時代の小説家であるプレーム・チャンドが散文を文学の中心に押し上げた。この傾向を継いだのはサッチダーナンド・ヒーラーナンド・ヴァーツヤーヤン（アッゲエエ）だった。彼はインドの東北地方の旅を元に

『アレー・ヤヤワル・ラヘーガ・ヤード』（この遊牧民、記憶に残るだろう）を残し、ここにインド文学にそれまでほとんど見られなかった紀行文学を生み出したのである。アッゲエエに見られる俳句への強い関心、そして紀行文という形式は、私にとってインド文学と日本文学を繋ぐ大きな橋のように思われる。

古代インド文学から現代ヒンディー語文学までの歴史に見る重要事項一覧

年号	文学史上の出来事
	紀元前
2500 年頃	インダス文明
2000 年頃	アーリアン民族がインドに移住
1000 年頃	中央インドのガンジス河流域に進出、 『リーグ・ヴェーダ』が成立
800 年頃	『アタルヴァ・ヴェーダ』、『ヤジュル・ヴェーダ』、『サーマ・ヴェーダ』が成立
600 年頃	第一情事詩である『マハーバーラタ』の原形成
600 年頃	第二叙事詩である『ラーマーヤナ』をヴァルミキが成立
600 年頃	ウパニシャッドが成立
500 年頃	パーニニの文典が成立、ヴェディック・サンスクリットから情事詩の原形成
500 年頃	プラークリット言語が使われた
400 年頃	カウティリヤの『アルタ・シャーストラ』が成立
189 年頃	パーリ語の始まり

紀元後

- 30年頃 『ジャータカ』の成立
- 144年頃 仏教詩の『アシュヴァゴーシャ』の成立
- 320年 ヴァーツヤーヤナの『カーマ・スートラ』を執筆
- 375年頃 カーリダーサが『メーガ・ドゥータ』を執筆
- 510年 バーラヴィが叙事詩の『キラタールジュニーヤ』を執筆
- 627年 バーン・バッタが執筆した伝奇小説の『カーダンバリー』が成立
- 672年 ダンディンが詩論書の『カーヴィヤーダルシヤ』を執筆
- 1100年頃 現在ヒンディー語として使われているデーヴァナーガリ文字が形式が完成。
- 1172年 叙情詩人のジャヤデーヴァの『ギータ・ゴーヴィンダ』を執筆
- 1220年 チャンド・バルダーイーがヒンディー語の最初の叙事詩『プリトゥヴィー・ラージ・ラーソー』を完成
- 1253年～1325年 アミール・フスローがヒンダヴィという言葉をはじめて使い、ドーハーを作成。
- 1399年～1518年 神秘主義詩人カビールの活躍
- 1469年～1539年 シク教のナーナクの活躍
- 1478年～1580年 盲目の詩人スールダースの活躍
- 1498年～1547年 女性詩人ミーラー・バイーの活躍
- 1574年 トウルスィー・ダースが『ラーム・チャリット・マーナス』を執筆
- 1591年 ケーシャブ・ダースが『ラーマ・チャンドリカー』を執筆
- 17世紀頃 恋愛詩人のビハーリ・ラールが『サタサイ』を執筆
- 1846年～1884年 ヒンディー散文の父バーラテンドゥ・ハリシュチャンドラの活躍
- 1912年 マイティリー・シャラン・グプタが『バーラット・パールティ』を執筆
- 1880年～1936年 社会小説家のプレーム・チャンドの活躍。
- 1909年 プレーム・チャンドの『ソーゼ・ヴァタン』がイギリス国王によって発禁。
- 1877年～1938年 現代において最高峰を持つ詩を執筆したイクバールの活躍
- 1905年 イクバールは有名な詩の「サレ・ジャハン・セアッチャ」を執筆
- 1911年～1987年 詩人のアッギエーエの活躍

- 1941年 アッギエーエが心理小説の『シェーカル・エクジヴィニ』を執筆
- 1950年 ヒンディー語はインドの国語として認められた
- 1953年 アッギエーエが紀行文の『アレヤヤワル・ラヘガヤード』を執筆
- 1960年 アッギエーエが紀行文の『エク・ブンド・サフサ・ウチリ』を執筆

(補記)

本稿での図表は、「アパブランシャ語の文学」、「バクティ文学」、「リーティー・カール文学」の図は博士ラメース・チャンドラ・シャルマーが執筆した『ヒンディー語文学の歴史』（ヴィダー・パルカション、インド、2008年）を元に、私が用語を翻訳し、再構成したものである。

その他の図表は、すべて私が作成したものである。